ドラゴンクエストIV

知られざる伝説

エニックス

ISBN4-900527-48-3 C0276 P880E 定価880円(本体価格854円・税26円)

知られざる伝説
ドラゴンクエストIV
ENIX
エニックス

シリーズイラスト　菊池通隆
シリーズデザイン　杉本正人

DRAGON QUEST IV

Legend In The Dark

• 知られざる伝説 •

DRAGON QUEST Gallery
by Michitaka Kikuchi

BATTLE IN THE WATERFALL CAVE

Krift raised the Staff of Magma overhead.
We made it! Let's go Gardenburg.
M.Ishiachi.

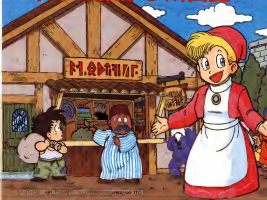
ドラゴンクエストIV

知られざる伝説

CONTENTS

ドラクエプレイランド

折込ゲーム

ネネの預かり所日記

——ここは持ち物とお金の預かり所です。どんなご用でしょう？　預けにいらしたのですか？　承知しました。何をお預かりいたしましょう。……鉄の鎧ですね。お返しする時、手数料を10ゴールドいただきます。かまいませんか？　……では、大切にお預かりいたします。行ってらっしゃいませ……。

こんにちは。わたしはネネ。エンドールの城下町で預かり所をやっています。以前はレイクナバにいたんですけど……。あら、ご存じでしたか。何ですって、評判のしっかりものの奥さん？　もう、お客さんったら、お上手ねえ。美人ですって？　いやぁだ。駄目ですよ。わたしにはトルネコっていう主人がいるんですから。ええ、子供も一人いますし。だから、おだてて預かり料をまけさせようったって、そう

はいきませんわよ。
あらら、商売がうまいって？　うふ、そういう褒め言葉なら大歓迎ですわ。自分で言うのも何ですけど、わたし、どんな物でも他のお店より高く売る自信がありますもの。以前は主人を助けて、ずいぶん儲けさせていただきましたわ。
え？　どうやって高く売ったか教えろ、ですって？　うふ……ひ・み・つ
――――
だって、主人が帰ってきたら、また商売を始めるつもりですもの。他のお店に真似されたら、うちのお得意さんが減っちゃいます。……あら、わたしったらつい話しこんじゃって。お客さんは引き取りにいらしたんでしたよね。はい、こちらがお預かりしていた水の羽衣です。10ゴールドいただきます
――ありがとうございました。またご利用くださいませね。
ふう。
今日はこのへんで店を閉めましょ。日記をつけなくちゃ。あなたが旅に出てから、わたしの日記もずいぶん厚くなったのよ……。

○月○日　はれ
「伝説の天空の剣を探し出して、心正しき人に渡せるのは自分だけだ。それこそが自分に与えられた使命であり、夢なんだ」
――そんな言葉を残して、今日、あなたが旅立って行った。
今のわたしにできることは、あなたが帰ってくるその日まで、家を守って子供を育てること。そのために、あなたが残してくれた鉄の金庫を使って、明日から預かり所を始めます。

○月○日　くもり
預かり所を開いてから、一週間が過ぎた。始めたばかりの頃はお客さんも少なかったけれど、だんだん増えてきたのが嬉しい。だけど、お客さんの剣や防具を見るたびに、思ってしまうの。
――預かるのじゃなくて、わたしが買いとって、後で売ればもっと儲かるのに……って。
けど、駄目ね。わたしは売る方はうまくても、物を鑑定するのが苦手だから。それに、見たことも聞いたこともない物を、買ってしまっていいのかもわからないし。
そういえば、今日、妙なものを預かった。隣の国ボンモールの紋章のある手紙なのだけど……。何が書いてあるのか見たけれど、ちっともわからなかったの。
だって、字がものすごくへたなんで

すもの。ボンモール王家の紋章があるくらいだから、きっと大切なことが書いてあるんでしょうね。
あなたが帰ってきたら、読んでもらうわ。

○月○日　はれ　ときどき　あめ

今日は変な天気だった。空は青いのに、雨がぱらぱらと降ってくる。そんな時、怪しげなお客さんがやってきた。見かけは立派な男の人なんだけど、どこかそぶりがおかしいの。コンコンと咳なんかして。だけど、お客さんだから、いつもと同じに預からせてもらったわ。品物は、鋼鉄の剣。男の人はにた～り、と妙な笑い方をすると、出て行った。
ところが、よ！
店を閉めた後に今日預かったものをチェノクしていたら、鋼鉄の剣がなく

なってるの。そのかわり、ひのきの棒が転がってて……。

うろたえたわよ、そりゃ。だけど、はっと思い出したの。あの男の人は、いつかあなたが言っていた、ボンモール北の村のキツネじゃないかって。

ということは、わたしはキツネに馬鹿にされたってわけ!?

んもう、くやしいっ！

今度、レイクナバへ手紙を出して、トムおじいさんの息子さんが飼ってる、犬のトーマスを連れてきてもらおうかしら。

絶対、許さないんだから！

○月○日　くもり　のち　はれ

今日、とんでもない物を預かった。黒くてドクロの彫刻のついた剣。かなり強力そうなのだけど――何だかいやな雰囲気なの。ひょっとすると、呪われた剣かも……!?

しかも預けてった人はさっさと町を出て行って、引き取りにくるつもりがないみたい。

縁起でもない。わたしと大切な子供が呪われちゃったら、どうするの!?

明日、教会へ行って神父さまに処分してもらおうかしら……。

○月○日　あめ

あー、怖かったぁ！

今日、お隣の地下にあるカジノの格闘場から、モンスターが逃げ出したの。しかも、メタルスライムよ。それが、わたしの店に逃げ込んできたのだから、もう大変！

お城から戦士さまたちが駆けつけてくれたんだけど、少しでも近づこうものならメラの呪文を唱えるので手が出せないの。わたしと子供は店の倉庫で

震えてたわ。そしたら、メタルスライムが子供に襲いかかってきたの！
わたしはとっさに、倉庫にあった武器を手に取った。
そしたら、まぶしい光が輝いて……
気がついたら、メタルスライムは消えていたわ。
わたしはびっくりして、手にした武器を見た。それは——あなたが以前、愛用していた正義のそろばんだったの。
悪魔祓いの力が、メタルスライムを消してくれたのね。きっと、あなたが遠くから、わたしたちを守ってくれたんだわ。
ありがとう。あなた……。

○月○日　はれ
預かり所を開いて初めて、お客さんの預かり物を断わった。
今日のお昼過ぎ、若い人がきて、お弁当を預けようとしたの。だけど、食べ物を預かって、腐ったら大変でしょ？　若い人は頭をかきながら出て行ったけれど……。
ねえ、あなた、覚えているかしら？
ここで店を始めた頃——あなたは、仕入れてきた品物と一緒に、わたしが作ったお弁当まで渡したわよね？　わたしは笑って受け取ったけれど……。
本当はあなたに食べてもらいたかったのよ。

あなたが旅に出たあの日も、これを売ってくれって、お弁当を渡された。だけど、あのお弁当は売らなかったわ。店を預かり所にした時、倉庫にしまった第一号の品物が、あのお弁当なの。
え？　腐ってないかって？　大丈夫よ。お弁当は毎日、作り直して新しい物にしてあるから。
あなたが帰ってきて、食べてもらうために……。
だから、あなた。安心して旅をつづけてね。わたしはいつまでも待っています。あなたが夢をかなえて、帰ってくる日を。

「へい、いらっしゃい。道具屋はこちら！」

「ここは武器の店だ。どんな用かね？」

「丈夫で長持ち、防具専門店です。ご用はなんでしょう？」

「そなたがここに来たのも神のお導き。我が教会にどんなご用じゃな？」

――これらの言葉全部、一人の男の口から出たものです。

そう。場所はこの世界で一番大きな大陸の南東……大河を上った丘にある村、ロザリーヒル。

ここに、男――老人はいるのです。

村に住むホビットはこう言います。

「この間、人間の爺さんがやってきて、この村で店を始めたんだ。まったく人間ってやつは商売がうまいよな」

ある時は道具屋、ある時は武器屋、またある時は防具屋……そして、教会の神父まで一人でこなす、この老人。

彼は、ただ金もうけのために、ロザリーヒルにやってきたのでしょうか?
いいえ。違うのです。
この老人、実はゴノトサイド——天空に一番近い町——の大神官の命を受けて潜入した密偵、つまり、スパイだったのです。
「何があろうとも、正体を知られてはならぬ。よいか、時間がかかってもかまわぬから、あの村の秘密を探り出してくれ」
ゴノトサイドの大神官が、一人の神官に密かに命令しました。
ロザリーヒルに、魔族の王として即位したピサロと申す者が、皇太子時代からひんぱんに顔を見せていることがわかったのです。もちろん、他の魔族も出入りしているようです。
あそこには、何か秘密がある。それを確かめることが必要だったのですが、ロザリーヒルはホビットだけが住む村。おおっぴらに情報収集はできません。
そこで。
使命を受けた神官は正体を隠し、商人としてロザリーヒルのホビットたちに近づきました。
まず老人は、道具屋として店を開きました。体力を回復する薬草や、毒消しなどを揃えると、これが大当たり。
野や山に出るホビットは、怪我をしたり魔物と遭遇したりしますから、老人の店は大繁盛です。どうかすると商品のストックが切れて、店に残るのはキメラの翼や匂い袋などという、普通ではめったに使わない品物だけになったりもします。
最初のうちは変な人間が来たと警戒していたホビットたちも、しだいに老人と気軽に言葉を交わすようになってきました。
これこそ、老人がロザリーヒルにやってきた目的なのです。
老人は、世間話の中から情報を拾い出し、密かに報告書をまとめました。中でも重要な情報は、
「この村の塔の上には、美しいエルフが住んでいる」
というものです。
そして、魔族の王ピサロは、とうやらこのエルフの娘に会いにやってくることもわかりました。
「うむ、このことをゴノトサイドの大神官さまに報告すべきじゃろうか?」
老人は考えます。が、ピサロとそのエルフがどんな関係なのかはつかめていません。老人はさらに情報を収集すべく、商売に励みました。
さて、ロザリーヒル周辺には、ベレスやグレートオーラス、ハンババといった、かなりの力を持つ魔物が潜んで

います。魔族の王が現れるからでしょうか、そいつらは日増しに凶暴になっていきました。

そうなると、村のホビノトたちも身を守るすべが必要になってきます。ある日、村の外で魔物とばったり出会い、命からがら逃げてきたホビノトが、老人の店にやってきました。

「いやー、ひどい目にあった。薬草を二つばかりくれないか」

「はいはい、まいどどうも」

「あー助かった。ところで爺さん、あんたの店で薬草や満月草なんかを売ってくれるのはいいんだけど、近頃はどうも物騒になって困ってるんだ」

「はあ……」

何のことかと老人は首をかしげます。

するとホビノトは、

「どうだろう、あんたの所で武器や防具も扱ってくれないかい？」

と頼むのです。老人は腕を組んで考え込んでしまいました。

この世界の商人たちの間では、武器屋には武器屋の、防具屋には防具屋の〝組合〟のようなものがあり、勝手に商売をしてはいけない決まりになっていたのです。

「つーむ、これは困ったわい」

「なーなー、爺さん、頼むよ。今までおいらたち、さんざんあんたをもうけさせてやったじゃないか」

ホビットがつめ寄りました。商人の決まりなど、こんな辺境の場所に暮らしているホビットにわかりっこありません。

「なー駄目なのか？」

どうやら、断ったら村を追い出されそうな雰囲気になってきました。そうなっては、わざわざここにやってきた意味がなくなってしまいます。

「……わかりました。つぎに仕入れる時に武器や防具も揃えておきますじゃ」

「さすがっ！　頼りにしてるぜ」

こうして老人は、かけもちで道具屋、武器屋、防具屋の三軒をやることになったのです。

情報収集の方も、徐々にではありますが、はかどってきました。

塔にいるエルフはロザリーという名前で、彼女が流す涙はルビーになっているということもわかったのです。老人の報告書は、だんだん厚くなっていきました。

村のホビットたちも、なにかと老人を頼り、いろいろなことを頼みに来ます。

ある日のこと。

「爺さん爺さん」

老人に武器や防具を仕入れてくれと頼んだホビットがやってきました。

「やあ、まいどご精が出ますなあ。今日は何をさしあげましょう？」

「いやいや爺さん、今日はまた、頼みがあって来たんだよ」

「頼み……？」

嫌な予感がする老人ですが、邪険に扱うわけにもいきません。

「はあ、わしにできることなら、なんでもやりますじゃが……」

「うん、この村のはずれの教会の尼さんは、おいらたちホビットの毒の治療をしてくれるのは、知ってるだろ？」

「はあ、それがなにか……」

「実はおいら、噂に聞いたんだけど、人間の世界にも教会があって、そこでは呪いを解いたり、死んだ者を生き返らせてくれたりするんだって？」

「ほかにも、お告げをしたりしますがね」

「そいつぁ便利だなあ。どうだい爺さん、あんたここで教会もやっちゃあく

れないか？」
「げげっ」
老人はびっくりしてホビットを見つめました。もしかして……自分がゴットサイドの神官だということがバレてしまったのでしょうか。
けれど、よくよく話を聞くと、そうでないことがわかりました。
人間をよく知らないホビットは、ただ単に教会が便利なもので、人間なら誰でも神父が務まると思い込んでいる様子です。
「しかし……」
老人はとまどいますが、あきらめるようなホビットではありません。
「なあ、頼まれてくれよ爺さん。あんたも余計もうかるし、おいらたちも大助かりなんだがなぁ」
やれやれ、これではホビットの方が、よほど人間よりわがままです。

それでも、老人は引き受けました。
彼は神官ですから、毒消しの呪文や生き返りの呪文も使えるのです。それに、教会は悩みを打ち明けに来るホビットが次々に現れますから、情報収集もぐんとはかどるのです。
その結果、魔族の王ピサロとエルフのロザリーは、恋人同士だということまでわかりました。
さっそく集めた情報をゴットサイドに報告に行こうとしたのですが……。
「おーい爺さん、薬草おくれ！」
「爺さんや、もっとよく切れる剣はないかい？」
「この鎖かたびら、買いとってくんないか」
「喜んでくれ！　今度おいらは結婚するんだ。おまえさんの教会で式を挙げさせておくれよ」
などなど、引きも切らずにホビットたちがやってきます。
とてもじゃないが、報告に戻るどころではありません。
そんな頃。
忙しく働く老人は、見知らぬ若者を

見かけました。その男は人間に似ていますが、どこか雰囲気が違っています。その威厳、目つきの鋭さ……ただものではないと老人は考えました。

男は塔に入って行き、しばらくすると村を去って行きました。

「何ものだね、あのお方は？」

店に来たホビットに尋ねてみると、

「なんだ、知らなかったのか。あれがピサロさまだよ」

「!!」

老人はびっくりしますが、もちろん顔には出しません。しかし、もし自分がゴットサイドのスパイであることが発覚したら、と考えると気が気ではありませんでした。

すると、ホビットが言いました。

「ピサロさまは、あんたのことを聞いてたぜ。人間のことが気になるなんて、変わった魔族だよなあ」

その口ぶりからすると、どうやらホビットは、ピサロが魔族だということは知っていても、まさか王様だとは思っていないようです。
「いやね、あれは何者だって聞かれたもんだから、おいらはこう説明したよ。――あの爺さんはここで商売したいっていうから入れてやったんです。まったく人間ってのは欲が深いですねって。いけね、本人の前でしゃべっちまった」
「はは、いやいや、お気になさらずに。で、……そのピサロさまは何と？」
「そういうことなら心配ないだろう。薬草などを売っていれば、ロザリーにもしものことがあっても大丈夫だって。かーっ、どうにも熱いね、こりゃ」
「ふむふむ……」
話を聞いて、老人は思いました。
「魔族の王といっても、恋人を思う気持ちは変わらんのじゃな……。わしが報告すれば、恋路の邪魔をすることになる。さて、どうしたものか……」
こうしているうちに、日は流れ、ある夜のこと……。
コンコンコン。
「こんばんは……こんばんは」
「ん？　誰ですかな、こんな夜更けに」
老人が寝ていると、誰かがしきりにノックします。
「すまんが、買物なら明日にしてくれんか。わしはもう、くたくたなんじゃ」
「ごめんなさい、お友達が風邪をひいたんです。どうか薬草を売ってください」
鈴をころがしたような、美しい女の声です。今までこの村では聞いたことがないと気づいた老人は、ドアを開けてやりました。
「すみません……」
と、そこには可愛いエルフの娘が立っていました。
（ははーん、この子だな、ピサロの恋人ロザリーというのは）
老人は感づいたことをおくびにも出さず、ロザリーを招き入れました。
「それはそれは、お困りじゃろう。ところで、その友達というのは？」
「それが……スライムなんです」
ロザリーは消え入りそうな声で言います。
「スライム？　あんた魔物の友達がいるのかね」
「あの、スライムっていっても、とっても優しい子なんです。だから、薬草を……」
「娘さんや、なにもわしは売らないと言っているわけではない。しかし、魔物を直すというのはどうも……」
老人は、ロザリーからピサロの情報を聞き出そうと、わざと意地悪く言い

ました。
「そんな……」
「なにかわけがありそうじゃね。聞かせてくれんか」

「はい……」
ロザリーは、語り始めました。
「そのスライムは、わたしがひとりで寂しいだろうと、あの人が置いていってくれたんです」
「あの人とは？」
「わたしの……恋人です」
ロザリーは少し顔を赤らめて言いま

した。老人はその恋人というのが、ピサロだということは知っていましたが、口には出さずに話を聞いています。
ロザリーの方も、恋人が魔族の王だなどとは言いません。しかし、老人の巧みな話術で、少しずつ話してゆきました。
「あの人は、わたしにはとても優しいのです。でも……」
可愛い顔を曇らせるロザリーです。
「彼は、戦いを始めようとしているのです」
「戦いを？　いったい誰に」
「今は、言えません。けれどもわたしは、それを止める力がある人に向けて、祈っています。いつの日か、メッセージを受け取った人が、ここロザリーヒルにやってくるでしょう」
「……」
老人は、ロザリーのピサロを思う心に打たれて、じっと聞いていました。
「あの……」
ロザリーがすがるような目で老人を見つめています。老人はにこりと笑って薬草の袋を取り出しました。
「すまんかったの、娘さん。さあ、あなたの友達に、これを飲ませてやりなさい」
ロザリーの顔がぱっと輝きました。
しかし……。
「あ……あの、わたし、お金の持ち合わせがないんです。いつか必ずお返ししますから……」
老人は微笑んだまま、首をふりました。
「いやいや、困っている時はお互いさまじゃ。さあ、持って行きなさい」
「ほ、本当によいのですか？」
「うむ。友達のスライムと……それからあなたの恋人さんによろしくな」
「ありがとうございます……！」
ロザリーは何度も何度も頭を下げて、塔の方へ走ってゆきました。
「ふむ……」
ロザリーの姿が見えなくなってから、しばらくして、老人はドアをそっと閉めました。
「なんという優しい娘じゃ。あの子がいれば、魔族の王と人間との戦いを回避できるかもしれん」
老人はひとりつぶやき、棚の奥に隠してあった大神官への報告書を手に取りました。そして、灯の火にかざし……
……数分後、報告書はひとかたまりの灰になっていました。
「わしの役目は、どうやらなくなったようじゃな……」
こうして老人は、一生をここロザリーヒルで過ごすことにしたのです。

ピサロナイトの涙

ある風の吹き荒ぶ夜、二人の魔界の親友たちは再会したのだった。わずかな光が巨大な城のシルエットを闇の中に浮かびあがらせている。

ここは魔族の城デスパレスである。磨かれていない黒大理石をただ重畳と積みあげた外城壁。

見るからに陰惨で恐ろしげな、魔族の王が住まう城。

鬱蒼と茂る杉林のなかで、名前も知らぬ夜の生きものが、かかかと嗤った。城の西側に立つ尖塔。今ここに一人の魔族の若者が、丸窓から下界を眺めながら、ある人物を待っていた。

夜風にあおられる杉林は、まるでごうごうと波打つ夜の海のようであり、また、絶え間なく天に向かって吹き上げられる黒い炎のようでもあった。

ひとつの暗い影が、尖塔の小部屋へつづく石づくりの螺旋階段を昇ってき

た。小部屋のとびらがコツコツと鳴った。部屋にいた魔族の若者はぱちんと指を弾いた。
かすかなきしみとともに、青銅を張った扉がゆっくりと開いた。
「よく来た、魔界戦士アドンよ」
「ピサロ陛下……」
螺旋階段を昇ってきた若い魔界の戦士アドンは、石の床に跪こうとした。ピサロが戦士アドンの肩を抱いてそれをとめる。
「よせ。ここには我々しかおらぬ。臣下の礼をとる必要はない」
「はっ」
「三年ぶりだな。諸大陸を横断し、人間どもの様子を見て回っていたそうだが……収穫はあったか、アドン？」
「ははっ。人間どもめ、未だ平和と安逸の夢に酔いしれ、われら魔族の本格的な攻撃が始まろうとしていることなど、つゆほども気づいておりません」
「そうか……」
魔界戦士アドンは、若い主君の表情に浮かぶかすかな戸惑いに気づいた。
「火急の御用と承りましたが……」
「うむ……」
暗黒の魔王ピサロは、踵を返して再び丸窓の前に立った。
外はまだ、ごうごうと吹き荒ぶ風が暗い杉の林を揺らしている。
ピサロはふっと笑った。
「アドンよ、お前と初めて戦ったあの日を覚えているか？」
「御意」
「強かったな、お前は……」
ピサロは遠い目をした。
それは凡庸たった先代の魔王が、まだ在世中のことだった。
はるかなる太古、エスタークが人間たちとの戦いに敗れて後、魔族は地上の闇の中へ逃れ、じっと復権の機会をうかがってきた。長い魔族たちの忍耐はようやく実を結び、魔族の軍団はエスタークの時代のそれを上回るほどの規模となった。
あまたの皇子たちの中から皇太子に指名されたピサロは、闇の後継者にふさわしい力量を見せ、エスタークの再来とさえ呼ばれた。
そんなある日、ピサロは父王に、御前試合を開くことを進言した。
そして自ら剣を握って、その試合に出場することも。
父王は驚愕して、皇太子たるピサロの試合出場の真意を問いただした。
ピサロは笑って言った。
「今やわが同胞は、地上にあまねく生息しております。エスターク王以来、

すべての魔族を統率できる指導力を持った王が現れたことがなかった。私がその最初の王となりましょう」
「それが御前試合となんの関係があるのだ？」
「御前試合に優勝した者が、新たなる魔族の王になることができるとみなに約束いたします」
「何だとっ!?」
「そしてこのビサロも自ら剣をもって出場し、堂々と他の出場者を撃ち破って優勝してご覧に入れましょう」
父王は息をのんだ。
「みなに十分に見せつけてやりましょうぞ。このビサロ、血統だけでなく、その実力も新たなる魔族の王にふさわしいことをっ！」
こうして御前試合は開催されることになった――。

魔の王城デスパレスの地下、十五尋の深さに秘密の円形闘技場が存在する。踏み固められた灰色の土の上で、何千年もの間、その強大さを自ら誇る魔族たちが生命と名誉をかけて戦いつづけてきた場所である。
御前試合の中盤から登場したビサロは期待にたがわぬ強さを満場に見せつけ、集まった魔族の強者の血を沸き立たせた。
まずブルデビルが、つづいてオーガーが、そしてレノドラゴンが、その実力を発揮する間もなく、ビサロの抜きんでた剣技の前にたたき伏せられた。

いずれも、この御前試合において皇太子ビサロを打ち倒し、自分がつぎの魔族の王にならんと野心をたぎらせてこの場に臨んだ魔物たちである。
ビサロはこの戦いにおいてただ剣を揮うだけで、エスターク以来と称せられる魔法を用いようとはしなかった。
それはビサロが、御前試合出場にあたって自ら課したことであった。
それでもなお、名にしおう魔族の強者たちは誰一人として、ビサロの身体にかすり傷ひとつつけることはできなかった。
ほとんど片手を使わないに等しい条

件のもとで皇太子殿下が堂々と魔族の強者どもを打ち倒したことは、一同に尋常ならざる感銘を与えた。
われらの主君はこんなにも強い！
ただ、ここにひとりの魔界戦士がいた。
その名はアドン。
魔族の間で知らない者のない、魔剣の使い手である。
アドンは、決勝戦で主君ピサロと相対した。
アドンは純粋な剣士であり、魔法を使うことはできない。
ピサロもまた当然のように、この決勝戦も魔法を使わずに戦うと自ら定めていた。
ピサロとアドンは、魔王の前にて一礼し、互いに剣士の礼をとってから、すらりと剣を抜き放った。
下半身を低くし、じりじりと爪先を

滑らせながら、二人の剣士は互いに死の斬撃を見舞う機会をうかがった。

いきなりアドンが跳んだ。

鷹のように空に舞い、アトンは手にした大刀に全体重をこめ、若き主君を強襲した。

鋼鉄の悲鳴があがった！　ビサロは剣を額の上で水平に構え、アドンの攻撃を受けとめ、そのまま一呼吸で剣を横薙ぎに繰りだした。

ピサロの攻撃はむなしく空間を斬り裂いた。

風よりも速く、アドンはピサロの剣の間合いの外に跳び退いていたのだ。すばらしい戦士であった。

ピサロは攻勢に転じた。

間合いは一瞬にして消滅し、ピサロの剣がアドンの頭上に降り注ぐ。

アドンは無造作にそれをかわした。

剣戟の音が高く響き渡る。

魔物たちはうっとりとそれに聞き入った。
それは鋼鉄の歌であり、ピサロとアドンは絶好の相方を得て舞い踊る、一対の舞踊家のようであった。
わずかの間隙をついて、アドンは勝機をつかんだ。跳躍によって一瞬の間を埋め、高くかかげた剣を主君の頭上に落下させたのだ。受けとめかねてピサロは膝をつく。
おおっというどよめきがあがった。
絶対の窮地であった。
アドンが剣を降りかざした。ピサロに勝てば、つぎの魔族の王位はアドンのものだ。
ピサロは唇をゆがめた。ピサロは思わず、手を前に突き出した。つぎの瞬間、すさまじい閃光が魔物どもの網膜を焼いた。
あれはベギラゴンだ！
アトンは顔を手でおおった。ピサロは跳躍して、下段の位置からアドンの剣を跳ね上げた。からからと乾いた音をたてて、アドンの剣が転がった。ピサロは、剣の切っ先をアドンの喉元に押しあてた。
「さすがは殿下、私ごときの若輩の及ぶものではございません」
ピサロは嘆息をついた。
「私はこの御前試合を、剣技のみで戦おうと自ら誓った。私が禁を破ったのは、お前の剣があまりにすさまじかったからだ。私はお前に、魔法を用いてしまったことの非礼を詫びねばならん。ただ剣をもってのみの戦いであったなら、私はお前に打ち倒されていた。お前こそは真の強者だ」
「もったいなきお言葉……」
「アドンよ、お前の剣をもって私に仕えてくれぬか？　この通り頼む」
「喜んで殿下にお仕えいたします」
こうしてアドンは、皇太子ピサロの直属の騎士となった。
そして魔物たちは、ピサロの強大さと、次代の王にふさわしい度量とに深い感銘を受け、心からの歓呼の声を叫んだのである。
「あれから三年。待つには長く、何事かをなすには短すぎる時間が過ぎた」
ごうごうと風に鳴る杉林を眺めながら、ピサロはつぶやくように言った。

「だが人が変わるには十分な時間だ。この三年の間に父は薨去し、私は新しい魔族の王となった……」

「私の忠誠心だけは、デスパレスを離れていたこの三年間を経た今も、ビサロ陛下のものです」

「ありがとう、アドン！」

ビサロはそう言って、穏やかな憂鬱の光をたたえた目をアドンに向けた。

「アドンよ、お前は女を好きになったことがあるか？」

「はっ？」

「全てを投げ捨てて構わぬと思うほど、ひとりの女に惚れたことがあるか？」

アドンは、魔族の王と万人に恐れられる若い主君の苦悩を感じとった。

ふっと微笑して、アドンは答えた。

「私にもございます」

「ほう、武辺ひとすじのお前が？　その話を聞かせてくれぬか？」

「御用がおありになったのでは？」

「構わぬ。お前の話が先だ」

「それでは……あれは私がバトランド地方の西を旅していたときでございました。私は人間の盗賊どもにいじめられていた、ひとりのエルフの少女を救ったのでございます」

「……」

「なにゆえにエルフの少女が人間に手取りにされ、折檻を受けていたのかは知りません。ただ私のなかに、押さえきれない怒りがわきおこり、気づいたときには盗賊どもを散々に蹴散らしておりました。エルフの娘がとめなければ、私は奴らをみな殺しにしていたかも知れません」

「お前が惚れたというのはその娘か」

「はっ。近くの森まで送ってやり、そのまま別れましたので名前すら聞いておりません。しかし、あの娘の悲しみにみちた大きな眼が、今も私のまぶたに焼きついております」

「お前らしいな」

ピサロは嘆息をついた。

「お前の話を聞いて、私も勇気がもてた。アドンよ、お前に頼みたいことがあるのだ」

「何なりと」

「実は、私にも愛する娘がいる。それこそあやつのためなら、闇の王座を投げ捨てても構わぬと思うほどのな」

アドンは静かにうなずいた。

「だが問題がある。私の愛する娘は魔族ではない。お前と同じく、私はエルフの娘を愛してしまったのだ」

「……」

「王権の笏を握る者にとっては、決して許されないことだ。それに……」

若き魔王は苦しげな息を吐いた。

「エルフであるあの娘は平和を愛するあまり、ことあるごとに私に戦いをやめるよう懇願するのだ。魔族の間には、そんな彼女を快く思わぬ者もいる。事実、これまで何度もあの娘は命を狙われているのだ」

アドンは静かにうなずいた。

「私は愛するエルフの娘を、ある小塔の中へ隠した。お前も知っていよう。人間と魔族、ホビットとエルフが混じり合う土地だ」

アドンはうなずいた。

「小塔へ入るには、あるものをもってしなければならない。あの塔に籠もっている分には安心だが、完全とは言えぬ。あの娘は魔族だけでなく、人間たちからも狙われているのでな」

「と、言いますと？」

「彼女が泣くと、その涙は美しいルビーとなってこぼれ落ちるのだ。欲深な人間どもは、そのルビーを狙ってあの

娘をこれまで何度となくひどい目にあわせおった……」
「………」
「アドンよ、私の代わりにロザリーヒルへ行き、その剣で彼女を守ってやってほしい。これは主君としての命令ではない。友として、お前に頼むのだ」
「ピサロ陛下……」
「私は魔族の王。だが同時に、ひとりの女を愛するただの男でいたいのだ」
「……わかりました」
「引き受けてくれるか、アドン？」
「お引き受けいたしましょう。臣下としてでなく、友として、ひとりの男として――」
「感謝する」
アドンは、若き主君がじっと親しげな視線を自分に注いでいるのに気がついた。
「アドンよ。私はお前につまらない役ばかり、押しつけているようだな」
「これよりさっそく、ロザリーヒルに向けて出発いたします」
「うむ……いや待て。まだかんじんのエルフの娘の名前さえ教えていなかったな。これを見るがいい」
ピサロは呪文を唱えた。
薄暗い部屋の中央に、虹色の光が生まれた。
光の中にぼうっと浮かび上がるのは、ひとりの美しいエルフの娘である。
「これは……！」
「これが私の愛するエルフの娘だ。名をロザリーという……」
「……………」
アドンはじっとロザリーの虚像に見入った。
そしてふっと微笑した。
「お美しい方だ。さすがに魔族の王の心をとりこにするだけのことはある……」
「アドン？」
「これにて失礼！」
アドンは漆黒のマントの裾をひるがえらせ、靴音高く、この塔の秘密の小部屋を辞した。
石造りの螺旋階段を、魔界戦士は足取り重く歩み下った。アドンはわずかに唇を噛んだ。
あまりに皮肉なことだった。
あの娘――虹色の光の中で浮かび上がった、あの美しいエルフの娘。
彼女こそはまさに、アドンがバトランドの西で救出し、名も告げぬまま別れたエルフの少女その人であったのだ。
まさかあの少女が、主君ピサロの想い人であったとは……そしてあろうことか、このアドンが彼女の護衛役に選ばれるとは……。
「ロザリーという名なのか……」

ア[ド]ンは哀しげな目をした。美しい[エルフ]の少女の顔を思い浮かべた。[そして]、若き主君ピサロの顔を。

「[これ]が、私の宿命か……」

アドンは、小脇に抱えた兜を両手でもち、ゆっくりと頭にかぶった。

もう二度と、私はこの兜を脱ぐことはあるまい。あのエルフの少女の前ではなおさらだ。私であることを知られ[る]ことなく、私はあの少女を守りぬく。

そして私はアドンの名を捨てよう。

私は以後、ピサロナイトと名乗り、文字どおりピサロ殿下の騎士として心を捨て、身を捨ててお二人に仕えよう。

心から敬愛する主君と、そしてひそかに愛してやまぬ少女の二人に。

生まれて初めての、そして生涯最後の涙が、ピサロナイトの頬を伝った。

夜を吹き荒ぶ風は、いつのまにかや

アネイル攻防戦

AUTHOR HIROSHI YOKOKURA ILLUSTRATOR KAZUNOBU NAKAZAWA

朝方から始まった戦いは太陽が中天にかかるころ終局を向かえようとしていた。千余を越える魔物の大群と二百に満たない人間の騎士団。数の上から見れば勝敗は明らかである。

だが、押されているのは魔物の側であり、戦場となった砂漠を縦横に駆け抜けて行くのは人間の戦士たちだった。紺碧の空に砂塵が舞い上がり悲鳴と馬のいななきが交錯する。

「行くぞッ！」

純白の駿馬に鞭を当て、白銀色の鎧の戦士が叫んだ。そしてその後方からは漆黒と葦毛、二頭の騎馬が砂塵を蹴立てて疾駆する。

三頭は丁度、正三角の陣形を組むと魔物の一群に向かって突っ込んで行った。正面から襲いくる敵を先頭を行く白馬の戦士がこともなげに薙払い、左右から攻め寄せる魔物は後方を行く二

騎が斬り伏せる。
魔物の群れはまるで鋭利な刃物に斬り裂かれたように二つに割れていった。三頭の騎馬が縦横に駆け抜けるに連れ、魔物たちの陣形が乱れていく。やがて無数に分断された魔物群に後方から押し寄せた戦士団が襲いかかった。
「グオーッ！　なんたるザマじゃ、敵は無勢ぞ」
形勢不利となった魔族軍の後方、本営の置かれた天幕の前で一匹のアンクルホーンが叫んだ。
この魔物、アンクルホーン一族の中でも最高の強者といわれるググアを隊長とする一軍が戦いを開始して早くも一ヵ月が経とうとしていた。
この戦い、すなわち後の世の史家がいうアネイル攻防戦である。
「エーイ。こざかしい人間奴らが！　こうなったらワシ自らがけりをつけてやるわ！」
怒り狂ったググアは本営を離れると三頭の騎馬に向かって走りだした。
「くらえっ！」
騎馬隊の真正面に立ったググアはヒャダルコの呪文を唱えた。
無数の氷の刃が白馬の騎士に向かって放たれる。
「白銀色の騎士奴、どうかわす？」
ググアは自らが放った冷気の矢を見ながらほくそ笑んだ。正面から迫る氷の刃を避けようとすれば必ず後につづく二頭の内どちらかの進路を遮らねばならなくなるはずである。
「陣形を乱し、速度が鈍った時が貴様らの最後だ！」
だが……白馬の戦士は左右どちらに避けようともしなかった。
キーン！　鋭い音が響き、戦士の構えた盾が冷気の矢を跳ね返す。
「ナニ!?」
驚く魔物の目前で白馬は一気に跳躍すると、頭上を飛び越えその後方に着地した。
「バカな……」
ググアは慌てて振り向くと再びヒャダルコの呪文を唱えようとした。
しかしその時には既に残る二頭の騎馬が間近まで迫っていたのだ。二人の戦士は同時に剣を振るい、魔物の両肩から鮮血がほとばしる。悲鳴をあげてのけぞるググアの前に今度は馬首を巡らせた白馬の戦士が迫っていた。
魔物の顔色が恐怖で青ざめる。
「ワワワノ」
日頃の豪放さもどこへやらググアは必死に戦士の剣をかわすと逃げだした。
「大将がにげるゾ!?」
隊長であるググアの逃亡を目にした魔物たちもまた我勝ちに敗走を始める。

「エーイ　なんてこった。一旦引き上げだ。銅鑼を打て」

ググアのいなくなった本営で副官のヒノハーが叫んだ。脇に控えたアームライオンが大鉄鎚を振り上げる。

グオーン！　グオーン！

アームライオンは六本の腕でつかんだ大鉄鎚で鋼鉄の銅鑼を叩き、その音が大気を震わせる。そしてすべて魔物たちは銅鑼の音を合図に一斉に戦場から離脱し始めた。

「まったくこのような結果。どのツラさげてエスターク様に報告するのだ？」

命からがら本営に逃げ戻って、ググアは今だに蒼白な顔を歪めて呟いた。

「報告などしてみろ。たちまちおまえの首が飛ぶぞ」

突然の声にググアはハッとして振り向いた。

「ヴァルーガ参謀殿ではありませぬか、いつこちらの戦区へ？」

漆黒の長衣を翻して立っていたのは魔族きっての知恵者。帝王エスタークの片腕といわれる、ヴァルーガだった。

「帝王の御下命だ」

ヴァルーガはぶっきらぼうに言い放つと鋭い目でググアをにらんだ。参謀の声はその目つき同様冷酷でまったく感情というものを感じさせない。

「陛下にはこのアネイル、尋常の手段では落とせぬとのお考えだ」

ググアはその言葉にブルッと巨体を震わせた。もし今の有様がエスタークの耳に入るようなことがあれば、必ず死刑になるだろう。

「して陛下は、帝王エスタークはいかなお考えで？」

「要を欠けとの仰せだ」

恐る恐る尋ねるググアに冷やかな視線を向けると、魔族の参謀はつぶやくように言った。

「カナメと申されますと……？」

「わからぬ……。わからぬが陛下は何か確信がある御様子であった」

驚いたことに帝王エスタークはこれまで名前すらろくに知られていなかった小都市、アネイルが通常の戦略では陥落しないことを予見していたのだ。そして腹心の参謀ヴァルーガにその攻略を命じたのである。

「わしは今から人間に化け、あの町に潜入する。陛下の言われたアネイルの要とやらを必ず見つけ出す。おまえはわしの知らせがあるまでここで陣を守っておれ」

そう言い残すとヴァルーガの姿は忽然と消え去った。

「かなめ……アネイルのかなめ……」

夕闇の迫った砂漠の陣営を風が吹き

抜ける。ひとり残されたググアはまるでつかれたようにその言葉を繰り返していた。

一方。魔物軍の敗走を目の当たりにした戦士たちは深追いを避け、戦場に取り残された残敵の処理と味方の負傷者の収容を開始していた。混乱を極めた戦場には敵味方ともに孤立した者も多くいたのである。

「カハンそっちはまかせたゾ！」

白馬にまたがった戦士が鞭を振るいながら怒鳴った。彼のまわりには逃げ遅れた魔物がかなり残っている。だが戦士はそんな敵などさして意に介する風もなく手にした長剣を振るって楽々と馬を進めて行った。魔物の中には戦士の姿を見ただけで戦わず逃げ去るものすら見受けられる。

「心配するな、この程度の魔物、蹴散

らしてみせるさ」
　カハンと呼ばれた若者も、自らの愛馬に鞭をいれると残された魔物の一団めがけて突進する。
「オーイ！　ラル！　こっちの負傷者はあらかた助けたぜ」
　戦場にいるとは思えぬほどのんきな声で白銀の戦士を呼んだのは、葦毛の馬に乗った青年だった。
「メルバおまえ怪我はないか？」
　先ほどまでの後方を走っていた仲間にそう呼びかけた戦士の横顔は意外と若く、少年の面影さえ残していた。
「バカにすんない、あの程度でやられる俺様じゃないや」
　メルバの答えにニヤッと白い歯をみせて笑った戦士は馬首を返すとアネイルの町に向かって走りだした。まるで潮が退くように行く手の魔物が左右に退く。やはり白銀色に輝く彼の甲の上でまっ白な羽飾りが揺れていた。
　この白銀色の鎧甲の戦士。彼の名はリバスト。アネイルを守る義勇軍の隊長、リバスト・ラル・クルトスである。
　その夜、勝ち戦に沸くアネイルの酒場ではカハンとメルバが酒を酌み交わしていた。どうやらカハンが荒れ模様でメルバはそのなだめ役に回っている様子である。
「だが面白くねェ……勝ったのは、昨日も今日も魔物どもを追い散らしたのは嬉しいさ……だがオレはやっぱり面白くはねぇぞ。だいたい今だってなんでヤツだけが町のお歴々が揃ってる会合に出てるんだ？　本当なら俺もおまえも出席して当然だろうが」
　カハンは吐き捨てる様に言うと杯をあおった。
「確かによォ、俺だっておまえの言うことはわかるぜ。戦ってるのはラルのヤツひとりじゃないよ。俺たちみんな、この町の人間ばかりじゃなくて他から集まった連中も全員がんばってるさ。だがよ、こうやってとにかく町を守っていられるのはやっぱりラルの力じゃないのかい？　会合だって俺たちが行けば必ずじいさん連中と喧嘩になっちまうだろうが？」
　メルバの言葉にカハンはむっつりと押し黙ると空いた杯に葡萄酒を満たした。カハンとメルバ、そして義勇軍の隊長であるリバストは共にこの町で、アネイルで生まれ育った幼なじみだった。鍛冶屋の家に生まれたリバスト。町の有力者である宿屋の長男、カハン。そしてメルバは道具屋の息子として子供の頃から一緒に遊んだ仲なのである。
　いま魔族の帝王エスタークが人間に対して戦いを起こし、世界は果てしな

い戦乱の時代を迎えていた。

ブランカ王国を陥落させた魔族軍は強国ガーデンブルグを包囲し、今また南の要衝、海上交易の中心地であるコナンベリーを目指して移動を開始していた。ここアネイルはコナンベリー、そして海峡を隔てたミントスへ軍を進める上では絶対に避けて通れぬ位置に置かれていたのである。

話は一年間前にさかのぼる……。

ブランカ壊滅、魔族軍南下の知らせにアマイルは騒然となった。

徹底抗戦を唱える者。また町ぐるみでコナンベリーへの避難を主張する者。議論は百出して容易にまとまりそうはなかった。その時である。リバストはこの町だけでなく近在の村々、いや砂漠の隊商たちをも含む義勇軍の設立を主張し、若者たちの圧倒的な支持のもとで承認されたのだ。

「たとえここからコナンベリー、ミントスへ……いや世界の果てまで逃げようと魔族は必ず襲ってくるでしょう」
　町の有力者を前にリバストは抵抗することの愚かしさを説いた。
「誰もが最後は戦わねばならなくなるのです。人間同士の戦いなら降伏や恭順もありえましょう。しかし相手は魔族。我ら人間とは完全に相容れぬ敵なのです」
　決議が下された後のリバストの行動は素早かった。彼は信じられぬほどの戦略的、政治的手腕を見せ、近在の村人や砂漠の遊牧民たちを組織してきたのだ。
　そして以来、カハンやメルバは諸異と蓄毛、それぞれの愛馬を駆ってリバストと共にアネイルの防衛に当たってきたのである。
「だからよォ　なんであいつばっかしが英雄だの勇者だのってもてはやされなきゃならないんだ？」
　だいぶろれつの回らなくなってきたカハンがドンヨリとした目で言った。
「もとはと言えば俺たちみんな仲間、友達じゃないか。それが……それがあいつだけ」
　メルバにはカハンの気持ちは痛いほどわかっていた。子供の時からガキ大将で親分風を吹かせていたカハンだが、その実は人一倍寂しがりやなのだ。
　幼なじみのリバストがなぜか自分たちとは違う人間になってしまったような、そんな今の状況がカハンにはたまらなく寂しかったのだ。
「そういやあいつが変わったのは三年前にミントスへ旅してからだよな」
　やはりかなり酒の回ったメルバがポツリと言った。
　三年前、親ひとり、子ひとりだったリバストは父を亡くした。そしてその葬儀が終わって一カ月も経たぬうちに彼はミントスへ旅立ったのである。
「そうよな何でも親戚に会いにいくとか言ってよ……」
　当時のことを思い出しながらカハンが相づちをうつ。
「そんときだろあのスゲー鎧と盾、それに兜と剣をもって帰ったのは」
　リバストは大きな荷物をミントスから持ち帰った。それがいま戦いに明け暮れる彼が身につけている白銀の鎧や兜なのだ。
「俺だってあの装備がありゃあヤツと同じように……イーヤもっと強くなれるはずさ」
　カハンはそう言って葡萄酒をつごうとした……が、酒の壺は既にからだった。
「オーイ、酒だー　酒がないぞ」

そう怒鳴る彼の杯に横から誰かが手を伸ばすと金色に光る酒をつぎ始めた。

「誰だいあんた？」

メルバが酒の壺を手にした男の顔を見て尋ねる。この町ではついぞ見かけぬ異国風の男だ。

カハンはこぼれそうになった杯に慌てて口をつけ、さもうまそうに酒をすすっている。

「わたしはリフ、砂漠の向こうにある小さな村に住んでおりました」

男は今度はメルバの杯に酒をつぎながら答えた。

「そうかあんたも魔物どもに追われて逃げてきたんだね」

いまつがれた酒をあっという間に飲み干したカハンが袖で口元をぬぐいながら言った。

「左様です。この町にはそれは強い方々がおられると聞き、やっとの思い

で逃げてきたのです」

魔族軍の侵攻、移動にともないその進路となった地域はことごとく破壊され焼きつくされた。逃げ遅れた住民は魔物の餌食となり、いくつもの村や町が地図の上から消えていった。

そしてこの町の義勇軍がかなりの規模になっていると知った難民たちは先を争ってアネイルを目指したのだ。

「その鎧や盾は随分と見事な品なんでしょうナ」

黄金色の美酒。自家製の蜂蜜酒とやらを振舞い、カハンたちと意気投合したリフはしきりにリバストの武器や防具について知りたがった。そして最前はうらみがましいことを言っていた二人もまるで我がことのように白銀の鎧や剣を自慢していた。

「しかし、そのリバストとかいわれる戦士がお強いのはご自身の力より装備した武器と防具の威力のような気がしますな。例えばお二人がその装備のどれか一つでも身につけ、手にされれば今の何十倍もの働きができるのではないですかナ？」

「それはまァ、なんと言うか……」

「確かに俺たちだって白銀色の武器と防具さえあれば……」

蜂蜜酒の杯を重ねるに連れ二人の、カハンとメルバの思いは微妙に変化し始めた。もしこの時、注意深い人間が見ていればリフの手にした酒壺が何杯つごうと空にならぬことに気づいたろう。

三人の宴が続いている丁度その頃、リバストは昼間の疲れを癒す間もなく、町の長老や有力者たちとの会合に臨んでいた。出席者は全部で十人ほど、リバストとはほとんど昔からの知り合いである。

「のうラル、いやリバスト隊長……」

一瞬、リバストをその幼名、子供の頃の名で呼んだのはこのアネイルの町長を務める老人だった。

「確かに義勇軍はよく戦っておる。失礼ながらワシもお主ら若者がこうまでがんばれるとは予想してはおらなんだ」

当初、義勇軍の設立に懐疑的だった町の有力者たちも今では完全にその意見を変えていた。最初の攻撃を退けて以来リバスト率いる戦士団は完全に町を守りきっていたのである。

三日も持てば……と思われた籠城戦は人間側優位のまま既に一ヵ月が経過していた。

だが戦いはあまりに長くつづきすぎた。そしてそのことが新たな問題を生んでいたのである。

「そもそもこの戦いは援軍を当てにし

てのこと」

町長の言葉をひきついで喋り始めたのは、義勇軍の一角を担う砂漠の住民たちの族長だった。乗馬術に秀で、また戦うことにも慣れた彼ら砂漠の民の参加は、義勇軍の設立にあたってリバストが一番苦労した点であった。そしてまたこの砂漠の民の長もリバストの意気に、戦いに臨む志に感銘して協力を約束したのだ。

アネイルに近在の力を結集し援軍を、人間側の反攻を待つ。それがリバストの提唱した基本的戦略だった。

またそうでなくては籠城などという戦法は最初から無意味、単なる時間稼ぎに過ぎないのだ。

「リバスト殿の策は半ば成功したといえるでしょう」

族長はそう言うとため息をついた。

「だが援軍は？　肝心の援軍はどうな

ったのです？　聞けばこのアネイルには食料がもういくらも残っていないとか……このままではたとえ魔物どもを阻止しつづけたとて全員が飢死にしてしまいますぞ」

町長にしろ族長にしろリバストを責める気はなかった。自分たちもまた戦士の策が良かれと考えたから賛成したのだ。ブランカ陥落とそれにつづく魔族の動向を避難民から聞いたリバストの動きは、まるであらかじめ予定していたように素早かった。籠城の決定と義勇軍の設立を町議会に計り、それが承認されるや即座にコナンベリーへ使者を送ったのだ。そしてその使者に志願したのはあのカハンだったのである。

だが最初の予定では七日程度でやってくるはずの援軍は、未だに影も見えないのだ。

「いまこの席でこんなことを言うのも何ですが……」

おずおずと立ち上がったのはカハンの父だった。いまでこそ義勇軍や難民の宿舎に代わっているが彼が経営する宿屋は町一番の規模を持っている。

「まだ多少の食料があるうちに、そして敵が気勢をそがれているうちに避難するべきではありませんかナ」

元々、非戦派だったこの有力者の立場は微妙だった。跡取り息子のカハンが義勇軍に参加し、しかも援軍要請の使者にまでなっていたからだ。

「確かに食料が尽きてはどうにもなりません」

リバストはいつものように一人一人の目をしっかりと見つめて話しだした。

「ですが避難の途中を襲われたらどうなります？　柵に囲まれ、堀に守られているからこうしてわずかな手勢だけで守っていられるのです。見通しのいい草原で魔物に追撃されたら……まして女子供や負傷者まで連れて落ち延びられますか？　正直なところ我らにそんな状態で戦える自信はありません」

この時、リバストは既に覚悟を決めていた。このまま戦いつづければ人間側の軍勢がこの地に着いたとしても、その時にはアネイルの町は全滅してしまっているのかも知れないのだ。

気まずい沈黙が流れた。誰にもこれといった妙案があるはずもなく、かと言ってこうして集まっている以上結論を出さぬわけにもいかないのだ。

彼らにアネイルの人々には時間も選択の余地もさほどは残されていないのだから。

「ワシにも一言いわしてもろうてエエかの？」

静寂を破ったのはカシム老人だった。先代の町長を務めたこの人物は相

談役という名目で会議に参加していた。
老人は大儀そうに椅子を立ち、左右に座っていた男たちが慌てて手を添える。
「ワシャもう歳じゃ、難しい話はようわからん」
老人は半ば白濁した目で一同を見回し最後にリバストに視線を向けた。
「ラルよ、考えてみればおまえもまァ随分と大きゅうなったよな。ガキの頃は弱虫で親父さんが大層心配しとったか……」
まるでのんきに昔話を始めた老人に一座の人々から苦笑がもれる。だが、リハストだけは老人の目が笑ってもいなければ、また彼がモウロクしてもいないことを理解していた。
カンム老人は列席者一人一人の子供の頃の話を楽しそうにつづけ、また誰もそれを遮りはしなかった。
「いつだったけの？　ラルが野良鶏

の雛を拾ってきたことがあったじゃろ？　ありゃなかなか可愛い魔物じゃったの」
老人はそう言うともう一度全員の顔を見回した。緊張がほぐれ誰しも日頃の落ち着きを取り戻している。
「さてと本題じゃ」
老人は今までとはうって代わった声音で言った。
「つまり問題はこうじゃろ、町から出てどこぞへ逃げれば途中を魔物に襲われる。かといってこのままじっとしておれば食い物がのうなって飢死にする。頼みの助けはこないし、どうすればエエかわからず困っておる」
カシム老人の言葉は問題の本質そのものだった。一同は再び苦渋に満ちた顔で沈黙する。
「ならばワシの考えを、いや願いを言おう」
老人の声は真剣で名状し難い迫力があった。
「ワシも歳じゃ。来年で百になる。魔物に食われずとも、また自分が食えずとも近々死んだバアさんに会うことになるじゃろ。だったらここで、生まれ育ったこのアネイルで最後を迎えさせてはくれまいか？」
カシム老人の発言をきっかけに議論は終結へ向かった……アネイル町の臨時議会は引きつづきの籠城を決議して閉会したのだ。
あくる日、あれほど執ように攻撃をかけてきた魔族軍はピクリとも動かなかった。陣立てはそのままにアネイルをにらんで全軍が待機をつづけている。
そして久しぶりの休息を取っていたリバストをカハンとメルバが訪ねたのは日もかなり傾き始めた頃だった。
「実はな、今日はラルに頼みがあってきたんだ……」
いつもなら話すのはカハンに任せているメルバが先に口を開いた。
「単刀直入に言うぜラル。おまえの白銀の武器と防具、どれか一つでいいから俺たちにつかわせちゃくれないか？」
この時、リバストがもう少し二人の様子を冷静に観察していれば……。あるいは彼の悲劇は防げたかも知れない。だが戦士は唐突な友人の言葉に多少ともいつもの判断力を失っていた。
「なぜだ？　なんで急にそんなことを言いだしたんだ」
リバストは逆に問い返した。
「なんだ駄目なのか？　おまえあの鎧や剣はもらいもんだって言ったよな？」
目つきが異様に鋭くなったメルバが

尋ねる。

「そうとも、俺は覚えてるぜ」

カハンもまたいつになく低い声で言ってリバストを見つめた。どこか虚ろで、それでいて確信に満ちた口調だった。

「俺が誰からもらったって聞いたらおまえ、神様だって言って笑ったよな？　神様からもらったんなら今みたいな非常時に独り占めしとくことはないんじゃないか？」

戦士は黙り込み、二人の幼なじみもそれ以上何も言わなかった。

「わかったよ。おまえらがそう言うならどれかひとつずつ、好きなのを貸してやるよ」

リバストは沈黙に耐えられなくなったかのようにうなずくとそう答えた。

「約束だぜ。今度魔物が攻めてきた時にゃ必ず貸してくれよ」

「あぁ……俺は友達との約束は守る」
力なく答えるリバストを見てカハンとメルバはうなずき合った。
その時、まるで二人がうなずくのを合図にしたかのように教会の鐘楼で鐘が打ち鳴らされた。魔物の襲来を告げる鐘だった。
「約束だぜ」
まるで鐘が鳴るのを知っていたかのように落ち着いた口調でメルバが言った。
「俺はこいつを借りるとするか……」
カハンの手はそう言いながらリバストの剣に伸びている。
「おまえたちいったい……」
リバストはただ呆然としてそんな二人を見つめていた。
その日の夕刻、突然始まった魔族の攻撃はいつもと戦法を異にしていた。
今までは、槍状あるいは扇状の陣形を組み、アネイルの町の一点を狙ったり、または包囲殲滅しようとしていたのだが……今日は全く違う形で押し寄せたのである。一見乱雑で何の計画性もない魔族軍の動き、それは防戦に出撃した人間側のただ一点を狙っての攻撃だった。
魔族の攻撃目標。それは義勇軍の先頭で指揮を取るリバストただひとりに向けられていたのだ。
もちろん白銀色の鎧に身を包んだ人間の戦士は魔族の間でも知られてはいた。魔族軍の隊長であるアンクルホーン・ググアもリバストを倒したものには褒美を与えると部下たちに約束していた。そしてこれまでの戦いでも多くの魔物が功名心から、単身であるいは何匹かの群れでリバストを狙い、そして撃ち負かされてきたのだ。
ましてや先日の戦闘では、そのググア自身がリバストと彼の率いる戦士たちと戦い惨敗しているのだ。
しかし今日の攻撃はそれらとは本質的に異なっていた。千にのぼる魔族軍は総力をあげてリバストひとりを狙い、動いていたのである。
無論、いかに多くの兵力とはいえ、一度にひとりを攻撃できる数には限りがある。仲間たちと離されたリバストを中心に魔族軍は渦巻状にひしめきあい魔物同士でもかなり混乱が起きていた。
そんな魔族側の動き、リバストひとりを狙った攻撃に義勇軍も当初はかなり動揺したが、やがて孤立したリバストを救助すべく何人もの戦士が魔物の群れに向かって突撃を繰り返し始めた。
だがそんな戦士たちの中に本来先頭に立って戦うべきカハンとメルバの姿は

見あたらなかった。このとき二人はリーストを中心とした戦場の遙か外周部にいたのである。大ミミズやはさみクワガタ――魔物の中でも雑魚としか呼べない敵を相手に戦う二人の表情は虚ろだ。その動きは明らかに普段と異なっていた。カハンの手には白銀色の剣が、メルハの手には盾が光っている。

そしてそんな戦場の遙か後方。魔族の本営の前では黒衣の参謀ヴァルーガとググアが戦況を見守っていた。

「よろしいのですかヴァルーガ殿？」

ググアが不安気に尋ねた。

「この様な戦法をつづけておりますれば味方にもかなりの被害が……」

ヴァルーガは攻撃軍の隊長であるググアの言葉を完全に無視し、ただ冷酷な笑みを浮かべて戦いを眺めていた。

周囲を取り巻いたリリパットが放つ矢を手にした盾で防ぎながら、リバストは懸命に血路を開こうとしていた。
白銀の鎧は敵の返り血と自らの血潮で朱に染まり、致命傷となるほどのものはないにせよ、手足にもまた無数の傷を負っている。葦毛の愛馬は既に力尽き、彼が徒歩での戦いを強いられてからかなりの時間が経過していた。
白銀の剣をカハンに、盾をメルバに渡してしまった今、リバストに残されたのは鎧と兜だけになっていた。
彼がいま手にしているのは死んだ父の形見の鉄の斧であり、通常の鉄の盾だった。
「退けっ！　おまえら雑魚でラチが開くか」
リリパットの一群を蹴散らすように前に出たのは攻撃隊長のググアだった。自らの手で白銀の戦士を倒し、一気にアネイルに突入する。戦いの実権をヴァルーガに押さえられたググアにとってそれは手柄を立てる、いや昨日の醜態と今までの敗戦を帳消しにする最後の機会だったのだ。
「昨日のアンクルホーンか……よりによってイヤなやつが出てきたぜ」
リバストは半ば他人事のように口にした。その時、戦士は既に死を覚悟していたのだ。
間合いを計ったググアが真正面からヒャダルコを放ち、戦士はとっさに冷気を盾で防ごうとした。
だがリバストがいま装備しているのは、計り知れぬ防御力を秘めた白銀の盾ではなくごく普通の鉄の盾だったのだ。戦士の左腕は冷気呪文の直撃に完全に感覚をなくした。
「死ねッ!!」
動きの止まったリバストめがけてググアが突進した。魔族の巨体と緋色に染まった戦士の体が交錯する。
肉と骨の断ち切れる鈍い音が響いた。

「やったぞ！　ついにあの戦士を倒したぞ……ハハハノ、ググアの奴最後になってやっと役に立ったわ」

リバストとググアの身体が折り重なって倒れるのを見届けたヴァルーガはそう言い放つと伝令を呼んだ。

「よいか。帝王御自身に伝えるのだ。アネイルの要は白銀色だったと。そしてその白銀の要はこのヴァルーガの兼で血に染まったと……わしもすぐに戻るゆえそれだけを伝えるのだ」

伝令の魔物、ドラゴンパピーはすさまじい速度で飛び去った。

「たとえ神が与えた武器、防具を身につけていたとはいえたったひとりで町の命運を左右するとは……人間とは不思議な生き物よな」

伝令の消えた空を見上げたヴァルーガがそうつぶやいた時、カハンとメル[illegible]として我に返った。風邪の熱

にも似た悪寒に全身を震わせ、若者たちは蒼白な顔を見合わせる。二人とも昨夜からの記憶は半ば以上残っていた。
酒場での話……リフと名乗った難民と彼が振舞ってくれた蜂蜜酒……。
「まさか……」
自分が手にした白銀の剣を見つめてカハンがつぶやく。
「あのリフって野郎……」
メルバは浮かんだ言葉を打ち消すようにゴクリとつばを飲んだ。いま二人はすべてが魔族の陰謀であったことを悟ったのだ。
「いくぞメルバ、ラルが危い！」
カハンは剣を鞘に収めると馬に鞭をあてた。一瞬、その後ろ姿を見つめていたメルバが慌てて後を追う。二頭の馬は魔物と人間が錯綜する戦場をすさまじい勢いで進んでいった。

「なぜだ？　なぜ奴らの戦線は乱れん？　アネイルの要である白銀の戦士は死んだのだ。それがなぜ……」
天幕の前に立ったヴァルーガは自分の目が信じられなかった。リバストの姿が戦場から消えればすぐにでも崩れると考えていた義勇軍は、むしろ一層激しく攻撃を仕掛けてきたのだ。
「リバスト殿は……我らの隊長は無事か？」
槍を手に叫んだのは砂漠の民の族長だった。行く手を遮る魔物を蹴散らし彼とその一族はリバストの名を呼びつづけた。カハンとメルバが、いや義勇軍の戦士全員がすさまじい闘志で魔物を倒しながらリバストの名を呼んでいた。
夕刻に始まった戦いは攻守、所を変えつつ夜を迎えようとしていた。
「参謀殿。ここは一旦兵を退き体勢を整えませんと……」
呆然として戦況を見つめるヴァルーガにアームライオンが声をかける。
黒衣の参謀は皮肉な笑みを浮かべると首を振った。
「もう遅いのだ……そなたも先ほど伝令を飛ばすのを見たであろう。まもなく北方より本隊が移動してくる」
虚ろな眼差しで答えるヴァルーガは既に自分の命運を悟っていた。この失態、たとえどのように抗弁してもエスタークは決して許してはくれないということを……。

コナンベリーからの援軍が到着したのはそれから二日後だった……。
ここに戦況は完全に逆転し、以後人間諸国の同盟軍は魔族に制圧された地域をつぎつぎと解放していくことになる。

皮肉なことにリバストの身体はググアの死体に守られる形で発見された。

アンクルホーンの巨体は、その上を通ったであろう魔物や人間に踏みにじられズタズタに裂けていたが、その下に隠れた戦士の遺骸はほとんど無傷だったのだ。

そして、激戦の中を辛くも生き残った二人、カハンとメルバは同盟軍に参加し各地を転戦した。不可思議なことだがリバストの武器と防具を二人が後々まで使用していたかどうかの記録は残されてはいない。激烈を極めたガーデンブルグの戦いでカハンは戦死し、メルバもまた終戦直前のアッテムト戦線でその生涯を閉じた。

二人の戦士はともに白い羽飾りをその兜につけていたが、その理由を知る者は少なかったという。

サントハイム城の恐怖

AUTHOR JUNJI KOYANAGI ILLUSTRATOR KAZUKO TOMIDOKORO

なぜこんなことになってしまったの？ あたし、何にも悪いことしてないよ……そうつぶやいてみても、あたしを襲ってる恐怖が去ってくれるわけじゃない。

「そっちへ逃げたぞっ」

どたどたという足音とともに、背後から追いすがってくる怪物たちの声が聞こえる。

逃げなくっちゃ！

「何をやってるんだ？ あとはそいつだけだぞ」

「くそっ、すばしこいやつめ！」

大理石の円柱の陰から、ぬうっと毛むくじゃらの手が伸びてきた。

いやっ、やめて！

あたしは体中のバネを使って、その場から跳びのく。残念そうなうなり声とともに、毛むくじゃらの手が空をつかむ。

もう、やめて！ どうしてあたしのこと、追い回すの!?
「え〜い、追え追えっ！」
怒り狂った声がそう叫ぶのが聞こえる。
え〜ん、恐いよ〜。
上を見ると、明かり取り窓から、わずかな星の光が室内に注がれている。あたしは本能的に、円柱を伝って窓から上へ逃れた。星空が広がる。
黒いみかげ石で築かれた内城壁から、下をのぞきこむと、灌木に囲まれた広いお城の内庭が見える。どうやらここって、東の翼屋の屋根らしい。怪物たちに追われて、とうとうこんなところへ出ちゃったんだ。
お城の人たちはどこへ行ったの？
どうしてお城中を逃げ回っているのに、ただ一人の人間にも出会わないの？
みんな、どうして消えちゃったの？
夕べ、ごはんを食べてから、早めに暖かな寝床にもぐりこんだ。
だって夕べは、日が暮れてから吹きはじめた夜風が高窓の狭間からしのびこんで、ちょっぴり寒かったから。
そしてお姫さまの夢を見た――。
自分の力を試したくて、このお城を飛び出していったおてんば姫の夢を。のびのびとした手足と、夏の光のようにきらめく瞳をもった女の子だった。
そして今朝、何だか悲しい気分で目を覚ましたら、お城の様子が一変していた。
馴れ親しんだ優しい人間たちの顔はなく、代わりにお城に満ちあふれていたのは、あの恐ろしい怪物たち。鎧をまとい、恐ろしげな斧をふりかざした怪物が、まだ寝床でまどろんでいたあたしを捕まえようとした！
あたしはひらりと飛び起きて、かろうじて怪物の手から逃れた。それからはまるで悪夢を見ているかのようだった……。
たくさんの怪物たちが、みんなしてあたしを追い回しはじめた。
あたしは必死で逃げた。
お城中を逃げ回ったわ。でも怪物たちはあきらめない。あの大きな体で、どこまでも追ってくるの。
もうどれほど逃げ回っているだろう？ あたしの自慢の脚は、もうずうっと痺れて感覚がない。もう限界まで疲れ果てている証拠……。
このサントハイムのお城には、強そうな兵士がたくさんいたのに、どうしてこんなことになってしまったの？
お腹すいた……。
朝ごはん、食べてない。毎朝、あたしにごはんをつくってくれる女の人が

いないもの。あの女の人だけじゃないわ。いつもあたしをからかう、赤ら顔で太っちょの牢番はどこへ行ったの？口は悪いけど、心根のまっすぐな炊事人の夫婦は？

ぶつぶつ言いながら、お姫さまが蹴り破った扉や天井の修理をしていた働き者の大工さんは？

そしてあたしがいちばん好きだった、金の冠をかぶったあのおじいさんは？

誰からも慕われ、尊敬されていたあのおじいさんまでいなくなるなんて……。

「いたぞ～っ」

あっ、見つけられた！

「もう逃げるところはないぞっ。おい、そっちから回りこむんだ！」

怪物たちがぐるりとあたしを取り囲んだ。

ああ、もうだめ……。

もう動く力も残ってない……。

「観念したようだな……」

先頭にいる一本角の怪物がにやりと笑った。あたしはその場にうずくまった。怪物たちが近づいてくるのがわかる。もう、いいわ。お城の人たちがいなければ、どのみちあたしだって生きられないんだから……。

でもその時、雷鳴のような声が頭の上へ降ってきた。

「貴様ら、何をやっておるかっ!?」

怪物たちが、それこそ雷に撃たれるかのように体を強ばらせた。

「へ、陛下さま……」

黒い影が降ってきた。ルーラの魔法だ。黒いベルベットのマントをまとい、まるで夜の闇の化身のような男があたしと怪物たちの間に出現した。あたしの目には、まるで巨人のように見えた。その男の全身からは、居並ぶ怪物たちさえ圧倒してしまうほどの威圧感が感じられた。

「この城ひとつに、いつまで手間取っておるのか？」

命令することに慣れた声がそう言った。怪物の一人が声を震わせながら答えた。

「お、恐れながら……猫の子一匹、残すなとのご命令でしたので……」

黒い影の男はわずかに頬をゆがめ、あたしの方をちらりとふりかえった。

「なるほどな……」

黒い影の男はふんと鼻を鳴らした。

「それで半日も費やして、そいつを追い回していたということか……」

「さようでございます」

黒い影の男の理解を得て、怪物はうれしそうに答えた。

「たわけっ!!」

きゃっ、恐いっ。

黒い影の男に怒鳴られて、怪物たちはいっぺんですくみあがった。
「ひ〜っ、お許しを……」
「貴様ら、融通をきかせるということを知らんのか？　確かに私は、この城に住むものすべて、猫の子一匹残さぬようにひっさらえと命じた。だからといって、本当にその言葉どおりにするやつがあるか！」
「お許しを……お許しを……」
「では私が、蟻の子一匹残すなといったら、本当に蟻の子までさらっていくのか？」
「お許しを……」
「私が、水も漏らさぬようにと言ったら、貴様ら、この城の屋根の雨漏りでも直すつもりか？」
すごい……この男一人に、怪物たちかみな、怯えきってるなんて……。いったい、この男は何者？

黒い影の男は舌打ちした。
「ちっ、まあいい。貴様らのようなぼんくらどもには、別の言い方をするべきであったわ」
あっ、男の手が!!
驚く間もなく、あたしは黒い影の男に抱きあげられていた。大きな手が、あたしの額に触った。
「恐い思いをさせたな……」
青玉のように透き通った瞳が、あたしの顔をのぞきこんでいる。
「おまえは宝石のような目をしているな。ロザリーによく似ている……」
怪物たちの領袖にしては、その碧い目はどことなく寂しそうだ。男の手があたしの喉に触れた。その手は暖かく、優しかった。
「だ、大王さま。この城からかどわかした人間どもをどうなさるので？」
怪物どもの一人が、おそるおそるたずねた。
「その件はあとだ。このサントハイム城は、バルザックにまかせる。至急、やつを呼び出せ」
「ははっ」
男はそっとあたしをおろした。
「この猫にはもうかまうな。引き上げだっ！」
ごうっと風がなったようだった。
あたしはまたうずくまった。
そしてあたしが目を開けたとき、あの黒い影の男と怪物たちは消えていた。
あたしは恐くなって一声高く鳴いた。
「にゃお〜ん」
あたしの声は夜風に吹き散らされて、闇の彼方へ吸いこまれていった。
あたしは一人ぼっちになった。
そして、あたしが孤独から解放されるのは、なぜかずっと先のことであるような気がした。

夢見る宿屋

AUTHOR/AKI TOMATO　ILLUSTRATOR/KUMI OHNO

こんにちは。旅人の宿にようこそ。お二人さまですね？　一晩12ゴールドですが、お泊まりになりますか？
——では、どうぞごゆっくりお休みください……。

わたしの名はブブル。イムルの町で宿屋を営んでいます。ええ、おかげさまでたいそう賑わっておりますよ。今日も、満室でしてね。

なぜ、これほど繁盛しているのか——
——実は、うちの宿に泊まると、素敵な夢が見られるからなのです。お話ししましょうか……。

わたしが子供だった時——そう、あの勇者さまと選ばれし者たちが活躍した頃の話です。宿屋の主は、わたしの父親でした。ええ、勇者さまもこの宿に泊まったこともありますよ。今でも

わが家の自慢のひとつですが……それはさておき。

その頃、宿屋は赤字がつづいておりました。ここに泊まると、決まって不思議な夢を見るのです。どんな夢かとお尋ねになるのですね。

……ずいぶん昔のことなので、わたしもよく覚えていないのですが――

確か夢は二つあり、最初はどこかの塔から、悲しみに沈んだメノセージの夢。二度目は恐ろしいことに、すべての人間に復讐するという内容だったと思います。

人々は気味が悪いと敬遠し、父親は経営難で商売を変えることまで考えたそうです。

ところが。

いつの頃からだったでしょう。見る夢の内容が変わったのです。そうですね……勇者さまが邪悪な者を倒してからでしょうか。

それは――美しい森。

梢からさす木洩れ陽が、地に咲く可憐な花を浮きあがらせ、アラベスクのような模様を描きます。

木々を渡る風に、飛び回る蝶の鱗粉が、時折輝きます。小鳥たちが、陽気に奏でているのは、愛の歌でしょうか。栗毛の犬や、白馬が、小さな泉から湧いた清水で喉を潤し……。

花の園の中で、微かに何かが動きます。

エメラルド・グリーンの髪が揺れました。美しい――女性。いや、よく見るとエルフのようです。

おや、木の陰からもう一人、やってきました。

人間の男の姿をしていますが、受ける印象は人のそれではありません。彼

の袖から黄金の光を放つものは、腕輪でしょうか。

二人——恋人たちは微笑み合い、そして寄り添います。至福の表情で……。

夢を見る者は、その、あまりの美しさに、幸福感と安らぎに、心をなごませます……。

夢が愛にあふれたものとなってから、この宿屋を訪れる人が増えました。特に、若い恋人たちに評判なのです。

今朝も、宿泊された恋人たちが、満足げに、——しかし、少しはにかみながら——出発しました。

「ねえ……あの夢、見た？」

「うん。君も？」

「あんな幸せな二人って、本当にいるのかしら……」

「さあ、どうかな。でも、僕たちも、あんなふうに素敵になりたいね」

「うん……！」

この宿に泊まって夢を見た恋人たちは、必ず幸せになるといわれています。

え？　夢に出る二人は、どこの誰か……ですか。

残念ですが、わかりません。

でも……。

ある旅の詩人が、わたしに歌ってくれました。

——地上では引き裂かれた恋人たちを
　天におわす竜の神があわれみ
　その愛を永遠に伝えるため
　ルビーの涙とともに
夢に残す——

わたし、ですか？

ええ、もちろん、この夢は何度も見ています。妻と一緒に……。はい、今度、わたしたちに子供ができるんです。

神父さんのお告げによると、男の子だそうです。名前はもう決めてあるのですよ。

ライアン——。

かつて、わたしを救ってくれた戦士さまと同じ名前です。

おや、もうお出かけですか？

では、どうぞ気をつけて、行ってらっしゃいませ。

幸せな夢と正しい神が、あなたと共にありますように……。

キングレオ王の悲劇

AUTHOR TAKASHI KUWANO ILLUSTRATOR NAOKO MORI

「やっと目が覚めたようじゃな……」
・ンブノーの姉妹の顔を心配そうに覗き込んでいた老人の顔に笑みが浮かんだ。
「う—ん、こ、ここは……いたいっ!」
重く、湿った空気が立ち込める中、先に目が覚めたのはミネアのほうだった。傷だらけになった体に時折、鈍い痛みが走る。しかし、朦朧とした意識の彼女には、それがなぜなのか、すぐに理解はできなかった。
ゆっくりと周囲を見回した彼女の視界に、横たわるマーニャの姿が映った。
「ね、姉さん!!」
ミネアは脇で倒れているマーニャの体を揺すりながら叫んだ。
「しっかりして！　目を開けて!!」
ぼろぼろになった踊り娘の服からは、当分、踊りはできないであろうほど、あざだらけになった身体が覗いていた

「これこれ、怪我人をそんなに揺するでない。マーニャなら大丈夫だろう、鍛え方が違う。もうしばらくすれば気がつくはずじゃ」

背後で老人のつぶやく声がした。その言葉に初めて自分以外の存在に気づいたミネアは、驚きの表情を隠せないまま、振り向いて声の主のほうを見つめた。

「あなたは誰？　ここはどこなの？」

「ここはキングレオ城の地下牢じゃ」

老人はゆっくり答えた。予期せぬ展開に戸惑いながらも、彼女の脳裏には、もう一人の仲間のことが浮かび上がっていた。

「オ、オーリンは、オーリンはどこ、？」

「私ならここにおります、ミネアさま」

気が動転していてわからなかったが、オーリンはミネアのすぐ横にいた。

「おお、オーリン、無事なのね、無事なのね！」

ミネアはそう言うと、オーリンの腕を両手でしっかり握りしめた。かなりの疲労感は感じとれるものの、オーリンのたくましい体つきと優しい笑顔を見て、彼女の心に束の間の安堵感が広がった。それからミネアは、改めて周囲を見回した。マーニャとオーリンの姿以外に彼女の視界に入ったものは、暗く湿っぽい石造りの壁と鉄格子、それに、一人のやせ細った老人の姿だった。ミネアの視線は、その老人のところで止まった。

「私のことがわからんかね、私は存じておるぞ、エドガンの娘、ミネアよ」

老人のまなざしに、いささか困惑しながらも、ミネアは記憶の糸を手繰り寄せ、おそるおそる尋ねた。

「……お、王様？　キ、キングレオの王様ですか!?　でも、まさか……亡くなったって聞いていたのに……な、なぜこんな所に？」

「やっと思い出してくれたかね……」

ミネアとマーニャはキングレオ前国王に会ったのはこれが初めてではなかった。今から十五年前、彼がまだキングレオ王として直接国を治め、現在の国王が皇太子であった頃、錬金術師である父エドガンに連れられて、何度か城を訪れたことがあったからだ。ミネアは優しく微笑む老人の顔に、懐かしい昔を思い出していた。

「お父さん、はやくはやく」

「もたもたしてると、おいてっちゃうぞー」

キングレオとコーミズを結ぶ街道で、手招きをしながら父エドガンを呼ぶ、幼いミネアとマーニャの姿があった。

「おいおい　ちょっと待たんか、おまえたち。そんなにお城に行くのが嬉しいか？」

エドガンは額の汗を拭いながら笑っていた。そのすぐ後にはオーリンの姿も見えた

「うん、とっても」

当時、国王は、エドガンの錬金術に対し、強い興味と理解を示していた。その研究を発展させ、世の中のあらゆる物に応用すれば、人類の進歩に計り知れない恩恵をもたらすであろうと考えていたからである。そのため、本来なら懸案となるはずの莫大な費用も、エドガンは国王からの資金援助を受け、弟子のオーリンと共に安心して研究に没頭することができた。

「おお、エドガン、遠いところをよくぞ参った」

キングレオ城の謁見の間で待っていたエドガンたちに、王はにこやかに声をかけた。

エドガンはある程度研究がまとまると、ときどき、国王の協力に対する礼も兼ねて、マーニャとミネアを連れ、城まで出向き報告をしていたのである。

「お仕事の話、まだ終わんないの？」

モとエドガンとオーリンが話すのを、横で退屈そうに見ていたマーニャが言った。

「こらっ、言葉を慎みなさい。王様の前だぞ」

「ははは、よいよい。子供は正直じゃのう。マーニャよ、すぐに終わるから今しばらく辛抱せい」

王は目を細めながら、マーニャの頭を撫でた。

国王への研究報告が済むと、その後は決まって娘たちの遊戯の時間であった。マーニャとミネアは王の前で得意の踊りと、まだうまくできない魔法のようなものを披露してみせ、拍手と褒め言葉を授かることを最大の楽しみとしていた。これは、エドガンのキングレオ王に対する細やかな感謝の気持ちであった。

ミネアは眼前にいる老人が、自分のよく知っている優しかったキングレオ国王であることを確認すると、その変わり果てた姿に愕然とした。

「王様、一体これはどうしたことなのですか？」

「ミネアよ、わしはもう王様ではない。王位は息子にゆずった。しかし、今では息子はバルザックに国の支配を任せたようじゃ。もっとも、今となっては奴は人間ではないが……」

その言葉はミネアの脳裏に戦いの記憶を蘇らせた。

（そうだ、私は仇のバルザックを追い詰めて、もうひと息というところで得体の知れない魔物が現れて……。キングレオ、確か、キングレオと呼ばれていた。でも、まさか……）

「今の王様が人間でないって、……どういうことですか」

ミネアが尋ねた時、横のほうで人の声が聞こえた。

「うーん、いたたたた……」

振り返ると、そこには片手で頭を押さえながら、上体を起こしていたマーニャがいた。

「姉さん！」

「ちっくしょう……派手にやってくれたな、あの化け物め……」

マーニャは首をぐるりと一回転させると、傷の具合を確かめるように体中をさすった。

「ようやく目覚めおったか、マーニャよ」

ミネアの肩越しに王が声をかけた。聞き覚えのある声に、それが誰であるかをすぐに確信したマーニャは、振り向いて叫んだ。

「あれーっ!?　もしや、王様、キングレオ国王ではないですか？」

懐かしさのあまり立ち上がろうとした彼女だったが、身体が思うように動かなかった。

「いたっ！」

「無理せんでもよい」

キングレオ前国王は微かに笑みを浮かべた。

「さすがはお姉さんじゃ、わしの顔を覚えておるようじゃのう。おまえたちは仇のバルザックを追ってこの城に忍び込み、逆に、返り討ちにあったのじゃ。進化の秘宝を使い怪物と化し、自らキングレオと名乗る、わしの息子に……」

「――――！」

瞬間、二人は言葉を失った。

自分たちを殺そうとしたキングレオの正体が、自ら怪物へと変化をとげた自国の王だったとは。しかも、最愛の父エドガンをバルザックに殺させ、横取りした進化の秘宝を悪用して。

しばらくの間、沈黙がつづいた。そして、王が口を開いた。

「息子とバルザックが手を組んでこんな野望を企んでいたとは、わしもうか

……だった。昔からあいつは血の気が多く、好戦的なことはわしも気にはかけていたのじゃが、悪魔に魂を売り渡しておったとは、さすがに気づかなかった……」

初めて聞かされた真相に驚愕しながらも、なんとか、ミネアは王の顔を覗き込むように尋ねた。

「悪魔に魂を売った？」

「ミネアよ、そなたも占い師を生業としているのなら聞いたことがあろう、魔王復活の噂を」

「はい」

返事をしながらミネアはお告げ所の話を思い出していた。

（そういえば、お告げ所でもその様なことを言っていたわ……。私たちが仇と狙う者は巨大な悪に守られているって……。もしかしてそのことと関係があるのかしら……）

「どうやら、その魔王復活を迎えるに当たって魔物どもは、我々の住む地上の制圧を図ろうとしているらしい。その頃、どんな経緯で息子と魔物が接するようになったのかはわしにもわからんが、大方、身の安全と地上の支配者の座でも約束したんじゃろう」

王は寂しそうな顔で、天井近くの換気孔を兼ねた窓を見つめていた。その隙間から差し込む光は人の顔を判断するのが精一杯だった。

「彼らは結託し、わしをこの牢に放り込むと、自らキングレオ王と名乗り、地上征服のためのいい材料を探していた。そんな時にやってきたのが、バルザックじゃ。息子にとってのいい知らせを持ってな」

「……進化の秘宝……」

ミネアは呟いた。その口もとは小刻みに震えていた。

バルザックはオーリンのように古くからエドガンに仕えていた助手ではない。今から五年前、キングレオ城まで研究過程を報告にいった帰り道、コーミズ村の入り口で倒れていたのを偶然助けあげたのが出会いの始まりだった。彼の説明によると、それまでもある錬金術師のもとで働いていたが、不幸にもその術師が病気で亡くなったため、職を失い放浪していた、ということだった。今となってはとても信用できるものではないが、エドガンはバルザックの「錬金術の知識がある」という言葉に、研究の忙しさも手伝って、彼を使うことにした。

「バルザックの奴、調子のいいこと言って、あのとき拾ってやった恩を忘れて……」

マーニャは無意識に手を握りしめていた。

確かに彼は最初は良く働いた。研究の内容も良く理解し、錬金術に関して素人ではないことをうかがわせた。しばらくすると、食料収集やキングレオ王への簡単な報告、届け物は、エドガンの代理として単独で出かけるようにもなった。しかし、そのことがマーニャとミネア二人の運命を大きく変えてしまおうとは、誰一人知るはずもなかった。

王は話をつづけた。

「エドガンの使いとして、バルザックがこの城を訪れるようになって以来、いつの間にか奴と息子は、地上征服という、だいそれた考えの下に手を組むようになった。そして、エドガンが進化の秘宝を葬ろうとした時、あの忌まわしい事件が起こったのじゃ」

話を聞きながらミネアは泣いていた。マーニャも泣いていた。二人に蘇る惨劇は止めどなく涙を流させた。

「お父さん……」

言葉にならないほどの声でミネアが囁いた。

「ミネアお嬢様……元気をお出しください」

自分も九死に一生を得たオーリンが、何と言って慰めていいのかわからぬまま話した。

「ありがとう、オーリン。泣いたってお父さんが生き返るわけじゃないもんね……」

服の裾で涙を拭くと、彼女はオーリンの方に向き直り、今度ははっきりとした口調で、自分の言葉を噛みしめるようにしゃべった。

「そうね、泣いてる場合じゃないわね。この屈辱を忘れずに、邪悪なるものから進化の秘宝を取り返し、葬り去ることが、残された私たちの使命なのよね」

「許せない……絶対に許せない。にっくきはバルザック！ 私たちのお父さんを殺した上、研究を奪って魔物に譲り渡すなんて」

うつむいていた顔をゆっくりと持ち上げたマーニャの表情は、身体の傷をも忘れて、憎しみをあらわにしていた。

そんな二人を見つめながら、王は再び話し始めた。

「今、城ではバルザックが、進化の秘宝をより完全なものにするために研究をつづけておる。何としてもそれを妨げ、魔物たちが利用するのを防がなくてはなら……ゴホッ」

「お、王様？」

マーニャはその絡みつくような咳払いに、心配そうに王を眺めた。はり詰めた空気があたりをつつんでいた。

「王様、大丈夫ですか」

そう、オーリンが気づいた瞬間、王

はゴホノゴホノと大きく咳込んだ。その口もとからは大量の血が流れていた。
「お、王様！」
ミネアはすかさず立ち上がって走り寄り、その手で唇の回りを拭った。そして、オーリンが老人の細い肩を両手で抱きかかえると、ベッドと呼ぶにはあまりにも粗末な寝床の方に連れて行き、布団をかけた。
「わしはもうだめじゃ。力尽きたらしい……。しかし、おまえたちはここから逃げ出し生き延びるのじゃ。ゴホ」
横たわった口から再び血が流れた。たが、そのことは気にも止めず、王は奥の壁の方を指さした。
「オーリン」
「はい」
彼は呼ばれるままに返事をした。
「あの辺りの壁を調べてみよ」
オーリンは訝しげな顔をしながらも、言われた通り示されたほうに向かった。壁の前に立つと微かに隙間風が吹いてくるのが感じられた。
「こ、これは！」
暗くて今まで気づかなかったが、石造りの壁に亀裂が入っており、一部、崩れかかっていた。オーリンはその亀裂に手をかけ、満身の力を込めた。わずかだが、重なり合った石がきしむ音が聞こえ、細かな破片が降り注いだ。指を掛け直し、彼はもう一度、試みた。すると石組は鈍い音を立てて崩れ、人

ひとりが通れるくらいの穴が開いた。穴の奥は小さな部屋のようだった。
「王様！」
オーリンは振り返りながら叫んだ。
「そこは今では使わなくなった隠し倉庫じゃ。その部屋の先は地上につながっている」
オーリンが皆のところに戻ってくるのを確かめると、キングレオ王は三人のほうを向いて話をつづけた。
「マーニャ、ミネア、そしてオーリン、今からわしの言うことをよく聞くのじゃ。隣の部屋の宝箱の中にはエンドール行きの乗船券が入っておる。おまえたちはそれを使ってこの国を逃げ出すのじゃ」
「何をおっしゃいます、王様も一緒に……」
ミネアの言葉をさえぎるように王は口をはさんだ。
「わしにはもはや、逃げ出せるだけの力がない。しかし、おまえたちはまだ若いし、ゴホノ、やらねばならぬ使命がある」
「やらねばならぬ使命？」
精一杯話しているのが、苦しそうな息づかいから容易に察することができたが、その険しいまなざしには一切の干渉を受けつけぬ威圧が感じられた。
「この世のどこかに、おまえたちを守り、魔物から人類を救う勇者が現れる。おまえたちはその勇者を探し、その者と共に戦うのじゃ。進化の秘宝が魔物の手に渡り、地獄の帝王の復活が囁かれる中、人間に残された道は他にない。いいか、生きてこの国を抜け出し、必ずや勇者を見つけ出すのだぞ。オーリン、二人を頼んだぞ」
そこまで一気に話をすると、王は一呼吸置いた後ゆっくりと枕の上で目を閉じた。その表情に、先程までの険しさは感じられなかった。
「二人を、頼んだぞ……オーリン」
変わり果てたキングレオ国王の姿を三人は心配そうに眺めたが、オーリンは念を押すその言葉に決意を固めると、無言のまま隣の部屋に向かい、鍵のかかっていない宝箱を開けた。中には乗船券が入っていた。
「さあ、マーニャ様、ミネア様、参りましょう」
乗船券を取り出し埃を払うと、オーリンは二人に来るよう促した。ためらいがちに壁の穴と横たわる王の姿を交互に見つめるマーニャとミネアだったが、やがて、己の運命をさとったように二人はオーリンの指示に従った。
「王様、キングレオと、その背後の魔王を必ず倒します。そして戻ってきます。必ず」

ミネアはもう一度振り向いて、大好きだったキングレオ王に話しかけた。その言葉に迷いはなかった。王の返事は聞こえなかったが、彼女にはその横顔が笑っているように見えた。

「さあ、行きましょう、この通路の先に地上への出口があるはずです」

オーリンは二人の手をひいて出口に向かった。本当の戦いは今始まったのだ。そんな誓いを胸に秘め、彼らは扉を目指した。

王は目を閉じたまま、三人の足音が遠ざかって行くのを聞いた。彼は彼なりの使命を全うしたことに満足すると、体中から力が消えてゆくのを感じた。やがて、彼方から扉の開く音が伝わった時、一筋の風が牢の中を吹き抜け、その後、静寂だけが残された。

ホイミンの夢 ホイミン

AUTHOR HIROSHI YOKOKURA ILLUSTRATOR KAZUKO TOMIDOKORO

「ライアン様がんばって！」

空中に漂ったホイミンが声援を送る。

「待ってろよホイミン。いまケリをつけるからな……イヤー ！」

裂帛の気合いを込めて戦士ライアンの剣がうなった。首を斬り落とされたはさみクワガタが音を立てて地面に倒れる。

ここはボンモールに程近い森の中。魔物とライアン、そしてホイミンとの戦いは今しも決着を見ようとしていた。数において圧倒的に優勢だった魔物側は二人の息の合った戦いぶりに翻弄され、半数以上が倒されていた。

「クソーッ　あのホイミスライムさえいなければ……」

戦士が残った魔物の一群に踊り込んだ背後で瀕死のミニデーモンが身体を起こした。この戦いが始まってすぐミニデーモンは得意のメラミでライアン

に重傷をおわせたのだ。だがそれは一瞬のこと。たちまち空中から舞い降りたホイミンによって戦士の傷は癒されてしまった。そして回復したライアンによって魔物は斬り倒され意識を失ったのだ。苦痛が死への眠りを中断したとき、目の前では仲間の魔物たちがつぎつぎと倒されていたのだ。

「ヤツだけは……あのホイミスライムだけは絶対に許さん！」

ミニデーモンは最後の力を振り絞るとホイミンめがけてメラミを唱えた。

「キャーッ！」

残った魔物を一掃したライアンが振り向いた時、ホイミンの身体は火炎呪文の直撃を受けていた。

「ホイミン！　しっかりするんだ！」

駆け寄ったライアンはキナ臭い臭いをあげているホイミンの身体を抱え起こした。

「ラ……ライアン様……一緒に旅ができて……楽し……」

何本かの触手を力なくもたげたホイミンの全身から急速に精気が失せていった。

そして……一瞬意識の途絶えたホイミンがわれに返ったとき、その目には自分の亡骸を抱いて号泣するライアンの姿が写った。

「？？？」

ホイミンにはしばし理解できなかった。自分は確かにここにいるのだ、だがライアンが抱きかかえているのもまた間違いなく自分自身の身体なのだ。

不思議なことにメラミの直撃をあびたときの苦痛は嘘のように消えていた。なぜか逆に気分がよかったのだ。

「ライアン様！　ライアン様。ボクならここにいますよ」

ホイミンは眼下の戦士に呼びかけた。

だがライアンにその声が聞こえている様子は全くない。

やがて戦士は焼けただれたホイミンの身体を抱え上げると近くに立っていた楓の木の下に運び穴を掘り始めた。

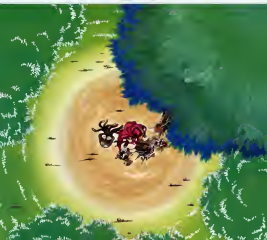
「ワッ!? どうしよう、ライアン様はボクを埋めてしまう気なんだ」

ホイミンは慌ててライアンに向かって叫んだ。

「ライアン様！　ボクは生きていますよ。埋めるなんてあんまりです……アリャ？　全然聞こえてないみたいだぞ!?」

この時になってホイミンにはやっと自分が死んだのだということが理解でき始めていた。

「なんてこったボクは死んでしまったんだ。それにしても痛くも苦しくもないな……死ぬってもっと恐ろしいことだと思ってたのに……」

自分が死んだことを悟った途端。ホイミンの意識は急速に上昇し始めた。
ライアンがその根元に屍を埋めるための穴を掘っている楓の木よりさらに高く。いや、遙かに連なる山々の頂さえ見おろすほどに彼の意識は空の彼方へと昇っていった。すべての景色が、森も街も湖も。旅をして来た遠い道は絵のように小さく霞み、やがて白い雲だけが周囲に広がった。
「……どこへいくんだろう？……空へ昇ってるってことは地獄じゃないよな……天国……？　まさか……魔物のボクが天国にいけるなんて……」
意外とのんきに考えていたホイミンの意識がスーノと遠くなった。
「ホイミンよ、ホイミンよ！　目覚めるのです」
耳元で自分を呼ぶ声が聞こえる。だがホイミンは、この心地よい眠りから

覚めたくはなかった。ヌクヌクと柔らかくまるで羽毛にくるまれているようなこの眠りから覚めたくはなかったのだ。

「ウーン、ムニャムニャ。お願いライアン様。もうちょい。もう少しだけ寝かせておいてくださいナ」

「これこれ寝ぼけてはいかん。起きないとこのまま暗黒の煉獄へ落としてしまうゾ」

レンゴクという言葉にホイミンはどこか聞き覚えがあった。詳しいことは覚えていなかったがどこか不吉な響きを持つ言葉だということはしっかりと記憶の底に残っていた。

「レンゴクってもしかしてそれ地獄の親戚だっけ？」

「そうじゃ。だから早く目をあけるがよい」

「起きます。起きます」

ホイミンがその大きな目を開くと彼の前には見たことのない老人が立っていた。白い長衣を着てやはりまっ白な髭をたくわえた老人の手には、不釣合いなほど大きな杖が握られていた。

「あなたはどなたですか？　それにここは……」

キョロキョロと辺りを見回すホイミンを老人は優しく微笑みながら見守っている。辺りは深い霧に閉ざされ、朝とも夕刻ともつかぬ薄闇が包んでいた。

「おまえは自分が死んだことは理解しているな？」

ホイミンはうなずくと老人の顔をジノと見つめた。

「なにか変なおじいさんだナ。顔もしわくちゃだけど普通だし、手足も着ているものも別にかわっちゃいないのに――」

ジロジロと自分を見るホイミンに、老人は嫌な顔もせず相変わらず優しい口調で話しかけた。

「さてとホイミンよ。本来なら魔物として生まれたものは死んだ後も再び魔物に生まれ変わるのが定めなのじゃが」

老人はそう言うとちょっと困ったような顔をした。

「だがおまえは魔物でありながら人間になりたいと望み、またそのために努力もしてきた。戦士ライアンを助けて旅をしてきたおまえの働きをワシは一部始終みてきたのじゃ」

そう言われてホイミンには初めてこの老人の正体が理解できた。

死して魂となった者を迎え、その生前のおこないから来世を定める老人。天国と地獄の狭間にはそんな老人がいるというのを以前ライアンから聞かされたことがあったのだ。

「……もちろん拙者とて死んだことがあるワケではないが……城の賢者殿の話では魂となった者は、皆その老人の前にいくという話だ——」

ライアンにしてみれば人間になりたいというホイミンの望みを半分哀れんでそんな話をしたのかも知れなかった。だが現実にホイミンは死に、そして目の前には老人がいるのだ。

「普通なら魔物はどんなことがあっても人間として転生させないのが決まりなのじゃが……」

「それじゃやっぱりボクは人間には——」

ホイミンの大きな目にじわっと涙がにじんでくる。

「まあ、待て。人間に転生させることはできぬが他にもおまえを人間にする方法がないわけではないのだ」

老人はそう言うと手にした杖をブンと振った。見る間に目の前の霧が晴れ、ホイミンの前に青空が広がった。そしてその空の下には巨石を積んで築かれた豪壮な城が見えている。

「あれはキングレオの城じゃ。これからあの城の中の様子を見せてやろう」

老人の言葉と同時に景色は城内へと移り、ホイミンは一瞬顔をしかめた。

城の中はまさに地獄のような有様だった。元は人間のそれもほとんどが若い女だったらしい異形の屍が無数に散乱している。全身から灰褐色の蔓状の管が無数に生えた者、魚の鱗に半身を覆われた者。誰もが尋常ならざる姿で息絶えていた。

「恐ろしい話じゃ。この城では進化の秘法という邪悪な魔道の実験が行われておったのじゃ。この屍たちはみなその哀れな犠牲者というわけなんじゃよ」

老人が痛まし気に言うと目前の景色が再び変化した。どうやら今度は城の二階らしく窓からは中庭の樹々が見えている。

「アレー、この人は身体が変になってないぞ？」

視点が二階の一番奥まった一室に移った時、ホイミンが驚きの声を上げた。その部屋で死んでいたのはまだ若い男だった。着ているものから察するにどうやら旅の吟遊詩人らしい。一階で死んでいた者たちと異なりこの男の身体はどこも変化してはいなかった。ただ、カッと見開かれた両眼だけがこの詩人が死んでいることを示している。

「この者は見ての通り旅の詩人じゃ」

老人はこの詩人が死ぬまでの経緯を話し始めた。元々、詩人は恋人の踊り娘と一緒に城で夜毎に開かれる宴会へ招かれてやってきたのだった。だが宴

とは名ばかり。このキングレオ城で行われていたのは神をも恐れぬ実験だった。

「一階で鱗だらけになって死んでおった娘が居るじゃろう、あの娘がこの詩人の恋人だったんじゃ」

変わり果てた最愛の人の姿を見た詩人は哀れ、その衝撃で死んでしまったのだ。ホイミンは二人の死に心から同情したが、老人が何故自分にこんな話をし、またこのような有様を見せたのか理解できなかった。

「さてホイミンよ。この詩人の屍は死してまださほどの時が経っておらん。すなわち今すぐおまえが、魂だけの存在となったおまえがこの男の身体に入り込めば……わかるなホイミン。おまえを人間として転生させることはできぬが新しい身体を、人間の肉体を与えてやることは可能なのじゃ」

老人はホイミンに詩人の身体の中へ入り人間として生きてはみないかと勧めた。

「魔物として生を受けたおまえが人間になる道は他にないのだ。例えこの先、何度生まれ、何度死んでも、常に魔物としての一生が待っているだけなのじゃ！」

老人の言葉にホイミンは思い悩んだ。

確かに、例え死人の身体に入るにせよ人間になれるという話は魅力的だった。まして魔物は絶対に人間に生まれ変われないとなれば、他に人間になれる可能性はないのだ。

……人間になってライアン様と旅ができたら……。

ホイミンの脳裏を戦士ライアンの面影がよぎる。そして、そしてホイミンは結論を出した。

「そんな……そんなことはできません！」

ホイミンはキッと老人をにらむと言った。

「ライアン様はいつも言っておられました。誇りなくして戦士たる自分は生きている意味はないと……ボクは魔物です。でも魔物にだって誇りはあるんです。この身体はいりません。だってこの身体はこの人のものなんですもの。おじいさんに魂を自由にする力があるならどうかこの人の、この詩人の魂を元の身体に戻してあげてください」

ホイミンの言葉を聞いた老人はなぜか嬉し気に微笑むと、手にした杖を頭上にかざした。雷鳴とも爆発音ともつかぬ轟音がして、ホイミンの身体、いや魂はすさまじい衝撃に包まれた。気を失う一瞬前、ホイミンは老人の声を聞いた。その真の姿をかいまみた。老人の姿、それは金色の鱗に覆われた巨大なドラゴンだった。

「よくぞもうしたホイミンよ。おまえが人間として生きるにふさわしい心。いや人間としても類いまれな素晴らしい心を持っているのはこのワシが見届けたぞ。もしワンの誘いに乗っておれば、おまえは未来永劫地獄の業火の中で苦しまねばならなかったのじゃ！自分より他人を思いやるその心を今後とも忘れるな！」

耳元で何か大きな声がし、ホイミンの意識は急速に戻り始めた。

「ウー、ワンワン」

「これ！ベスタおよしなさい」

ホイミンが目を開けるとそこには歯を向きだした犬と優しそうな女の顔があった。

「まったく、若い人はノンキでいいわネ。こんなとこで昼寝をするなんて」

女の言葉にホイミンは慌てて周囲を見回し呆然となった。柔らかな午後の日差しに照らされた草原はまるで緑色の海原のように風にそよぎ、遠くの山々には薄く雲がかかっている。

「アノ……？　ここは、ここはどこですか？」

見慣れぬ景色にホイミンが尋ねる。

「どこって……いやだよこの人は自分のいる場所もわからないのかい。ここはキングレオの国。コーミズに向かう街道さ」

人のよさそうな女はホイミンに近寄ろうとする犬を懸命に押さえながら答える。

「ともかくもうじき日が暮れる。良かったらあたしの家においでな……これヘスタいけません！」

犬はホイミンの足にかみつこうとしていた。そしてそのとき初めて彼は自

分の身体が変化していることに気づいたのだ。
何本もの白い触手はなくなっていた。胴体からはえているのは二本の足だ。そしてその胴体もブヨブヨした青い魂ではなくなっていた。
ホイミンは人間になっていたのである。
「まったくどうしちまったんだろうネこのコは？　こんな優しそうな人にかみつこうとするなんて」
女はベスタと呼んだ犬を抱え上げ首をひねる。
「あんたどっかで魔物とでも出会ったんじゃないの？　それで匂いがするんだよ。でなきゃこのコがこんなに吠えるわけないもの」
女の言葉にホイミンはハッとして犬の顔を見た。ベスタは見つめられるとどこか戸惑ったような表情を浮かべ低くうなる。
「それともさあんた前世が魔物だったとか――：ハハハッ。冗談だよ、冗談。ところであんたどこへ行こうとしてたんだい？」
話好きらしい女と、そしてやっと吠えなくなったベスタと歩きながらホイミンは最前の光景を思いだしていた。白い長衣の老人、そして地獄のようなあの城の出来事。それらはすべて幻だったのだろうか？　だがホイミスライムだった自分はいま人間として歩き、会話をしているのだ。
老人の、いやあの神にも等しい力を持ったドラゴンの真意がどこにあったのか？　それは自分にはうかがい知れぬことなのだろう。
「実は人を捜しているんです。その人はとても立派な戦士でボクの恩人なんです」
彼方にコーミズ村が見えはじめ、二人と一匹を照らす太陽は茜色にその光を変えはじめている。
「しかし人様々だねェ」
村の入り口で立ち止まった女はそう言ってため息をついた。
「恩人を捜している人がいるかと思えば仇を捜している人もいるんだから：・アラ？　ベスタったらさっきまであんなに吠えてたのに今度はあんたの手をなめてるヨ、そうか、あんたが人間だってやっとわかったんだね。まったく、いくら犬だって見ればわかりそうなモンじゃないか」
……そうボクも自分が人間だってやっとわかったような気がしますよ……
ベスタの頭をなでながらホイミンは心の中で思った。
初秋のコーミズ村に夜が訪れようとしていた。

ここは、モノハーハラ。酒場あり、歌あり、踊りありの娯楽にあふれた町です。人々は旅の疲れをいやし、一夜の楽しい夢を味わおうと、この辺境の町を目指すのです。

ほら、今日も劇場はお客さんでいっぱい。地下からは、人々の笑い声や拍手が聞こえてきます。

それもそのはず。

今日は、当代きっての人気者、パノンのステージなのですから。

芸人パノン――小話と洒落の天才。

しかし、その私生活を知る者はいません。彼がどこでいつ生まれたのか、謎のベールにつつまれているのです。

たったひとりでふらりと町や村に現れては芸を見せ、そしてまたどこともなく消えてゆく……。それがパノンなのです。

もっとも、パノンの芸を見る観客にとって、彼が何者なのかはどうでもいいことなのかもしれません。観客は単純に芸に浮かれ、酔い、満足して劇場を後にするだけで幸せなのですから。

しかし。

同業者たち——つまり、芸人や役者、踊り娘たちは、パノンのことを知りたくなるのも当然です。パノンの生い立ちや生活がわかれば、ひょっとすると自分もパノンなみの人気者になれるかも……なんて考えているのかもしれませんね。

おや？　劇場の裏の控え室で、何か話し声がしますよ。

どうやら出番が終わった男女のようです。若い男は芸人志望でしょうか。派手な服がまだ幼さを残す顔とマッチしていませんね。もう一人、女の子は踊り娘です。こちらも化粧は濃いけれど、まだ子供っぽさが抜けていません。

「……だからさ、パノンってのはもう、すげえ爺さんなんだってば！」

「なに言ってんの。彼はまだ若いわよ。せいぜい二十五か六ぐらいよ絶対」

どうやら議論の的になっているのは、パノンのことのようですね。もっとよく聞いてみましょうか。

「冗談じゃないぜ、おれの親父が小さかった頃、エンドールで見かけたっていうんだ。その時分から、芸人のパノンっていったらえらい人気者だったっていうぜ」

「そんなの何かの間違いよ。あたしの友達が、この控え室で軽業の練習をしているパノンを見たのよ。そんなお爺さんが軽業なんてできる訳ないじゃない！」

おやおや、議論は平行線のようですね。すると、もう一人、楽屋へ誰かがやってきました。この劇場の責任者、座長さんです。

「こらこら、何を騒いでいる。やや、まだステージ衣装のまんまじゃないか。さっさと着替えて明日にそなえて眠っておけ」

「あ、座長さん。これこれしかじかで……」

と、若い男が座長さんに説明します。

「なんだ、パノンのことか。それなら本人に確かめればいいじゃないか。ちょうど舞台も終わったようだし」

ステージの方からは、盛大な拍手が聞こえてきます。

「だってねー」

踊り娘が首を傾げました。

「パノンさんってなんだか、近づきが

たい雰囲気なんですよね」
「わたしかどうかしましたか？」
ひょっこり顔を出したのは、当のパ
ノンです。
「やあ、ご苦労さま、実は……」
座長さんは、若い二人が彼について
議論していたことを話しました。
「そうですか……」
微笑んで聞いていたパノンは、一人一人
を見て頷きます。
「別に、秘密にしていた訳でもないの
ですがね。ただ、わたしは人々を笑わ
せるのが仕事ですから」
パノンは、自分の本当の姿を観客に
さらしたくない、と前置きして、メイ
クを落としました。
「これがわたしの本当の顔です」
現れた素顔は四十代半ばの中年です。
「え――っ うっそ――っ もっと若いと
思ってたのに――！」
「あれれー、おっかしいなー。おれの
親父が見たっていうんだから、もっと
歳とってるはずなのに」
「君のお父さんが見たパノンというの
は、わたしではないのです」
「え!?」
驚く一同を前に、パノンは静かに話
し始めました。
今から百数十年前……所はゴットサ
イドの近くです。そこでは、大がかり
な遺跡の発掘調査が行われようとし
ていました。数千年も昔の、古代遺跡
を調査しようというものでした。
発掘の指揮を取ったのは、ゴットサ
イドでも高位の神官で、職務に忠実な
真面目な人柄で知られていました。彼
は常に苦虫を噛みつぶしたような表情
で、他人に対しても自分に対しても厳
しい男でした。
その名を、パノンといいます。
「先頃、大神官が受けたご神託によれ
ば……いずれ伝説にあるエスターク以
上の魔族が現れ、我ら人間に戦いを挑
んでくるという。この遺跡に封印され
ている古代の人々の遺産は、きっとそ
の戦いに役立つはずだ」
パノンは部下をせき立て、自らも額
に汗して発掘をつづけました。
伝説によれば、この遺跡には古代に
栄えた王朝、アンヴロヒアの秘宝が眠
っているはずなのです。
はたして、その秘宝とは？
今では忘れられた、凄まじい威力を
持つ魔法でしょうか？ それとも、失
われた技術を使った恐るべき武器でし
ょうか……？

発掘作業に当たること数百日、ついに、巨大な遺跡の最深部、奥まった宝物蔵とおぼしき場所が発見されました。

ところが。

中に保管されていたのは、古代文字を記した数百枚の粘土板だけだったのです。

いやいや、きっとこの粘土板には、古代人の秘密が記されているに違いない

ハノンは今度は、夜を日についで古代文字を解読し始めました。

しかし、粘土板に書かれていたのは、強力な魔法の呪文でも、恐ろしい兵器の製造方法でもなかったのです。

なんと、粘土板に書かれていたのは笑い話、幾千幾万とも知れぬ駄洒落小話、ジョーク、コントのたぐいでした

「な……なんなんだ、これは⁉」

真面目一方のパノンは激怒しました。

「なんだって古代人はこんなくだらないものを後生大事に残したのだ⁉」

その謎は、粘土板の中の一枚に記されていました。

『――遙か未来、この文を読む者に告げる、我はアンヴロピアの賢者ネプラスなり、我は予知す。汝が生を受けし時代もまた、戦あらんことを……』

ネプラスは激しい戦いの世に生きた賢者でした。彼は悟っていたのです。

――厳しい苦難の時代にこそ、人間には〝笑い〟が必要であることを。

そしてネプラスは、来るべき未来に向けて、様々な〝笑い〟を残そうとしたのでした。世界中から集められた小話や洒落は、粘土板に刻まれると地中深く埋められたのです。

苦しい時ほど、笑顔を忘れてはならない……大人も子供も、老人も若者も、等しく笑顔で暮らせる世界を造り、またその世界を魔族から守らなければならない……。

「そうか……そうだったのか」

ネプラスの遺言ともいうべき一文に、パノンは目から鱗が落ちる思いでした。

「わたしは今まで、真面目一方に世の中をとらえてきた。笑ったりふざけたりするのは一種、劣った行為とさえ考えていた……。だが、それは間違いだったのだ」

パノンはすべてを理解しました。

「笑うこと――どんな苦しい時でも笑顔を忘れぬことこそ、人間の持つ真の強さのあかしなのだ。そして……すべての人が笑顔で暮らせる世界こそが、本当の幸せなのだ」

大神官に許しを得たパノンは、神官の法衣を脱ぎ、旅に出ました。

厳格そのものの顔をおどけた化粧で隠した彼は、旅芸人となって世の中に笑いを広める人生を選んだのです。

「それが、初代のパノンです」

モンバーバラの劇場の楽屋で、現代のパノンが言いました。

「彼の志は、後々多くの人に……主に神官と、同業の芸人たちに引き継がれたのです」

座長さんと二人の若者は、言葉もなく聞き入っています。

「古代遺跡に眠っていた数千、数万もの小話や洒落は、書き写されて新しい経典のように、何人ものパノンに引

き継がれました」

パノンは少しだけ間をおいて、そしてつづけました。

「もう、おわかりでしょう。パノンはひとりではないのです。過去も現在も、そして未来も……何人ものパノンが、初代パノンとアンヴロピアの賢者の志を継いで世界に笑いを広めているのです」

そう言うと、パノンは再びにっこりと笑いました。

「あの……」

若者がおずおずと尋ねます。

「おれ……いや、わたしもパノンになれるでしょうか？」

パノンは目を細めて若者を見つめました。

「なれるとも。……人々の笑顔が好きならば」

地上に落ちた竜
白馬パトリシア

大地を遥かに離れた、空の彼方。雲の上に浮かんでいる美しい建物があります。

天空城――。

この世界すべてを見守る竜神マスタートラゴンの、宮殿です。

ここに住んでいるのは、マスタートラゴンだけではありません。翼のある天空人と、マスタードラゴンに仕える妖精やホビットたち、そして、いずれ神々の下で働くはずの神竜族の子供たちが暮らしています。

この、神竜族の子供――チビ竜たちときたら、揃いも揃って手のかかる腕白揃い。城の中をあっちへうろうろ、こっちへうろうろ。それだけならいいのですが、天空人のところへ行っては、仕事の邪魔をするのです。

子供ですから悪気はないとはいえ、忙しい天空人にとっては迷惑この上あ

りません。
　いずれは神様に仕えるチビ竜ですから、邪険にあつかうこともできないし、養育室へ追い返そうと思っても、なにしろ相手はチビとはいえドラゴンです。力も強く、おまけに炎まで吐くのですから、始末におえません。
　毎日毎日、チビ竜の養育係はてんてこまい。
「んもう！　何て子たちなの！」
「少しもじっとしてないんだから——」
「あっ！　あの子がいないわ！」
　あの子とは、チビ竜の中でもとびきり悪戯好きな——つまり、女の子のここした
　つい先日も、図書館で炎を吐き、大事な本を燃やしそうになったという、きわめつきの問題児なのです。
　その時は魔法を使える天空人が、とっさの判断でヒャドの呪文を唱えたので、何冊かの本の表紙に焼け焦げを作っただけで済みました。
　もしも、すべての本が焼失してしまったら、それこそ一大事。図書館にはこの世界の重要な歴史を記した本が、保管されているのですから。
　その問題児の姿が見えないのです。養育係たちはあわてて城内を探し回りました。すると、二階の奥の部屋から叫び声がします。
「うわあっ！　こら、ここに入っちゃだめだってば！」
　養育係たちは、急いでその部屋に向かいました。
　声がしたのは、世界樹の苗木を育てている温室です。
　ご存じのように、成熟した世界樹の葉は、死んだ者を生き返らせる力があります。しかし、世界中でも限られた土地でしか成長しません。
　温室で育てられている苗木は、復活の力は持ちませんが、長年の研究の結果、特殊な薬草のエキスにひたすことにより、一度に複数の者の体力と魔力を一瞬にして回復できる〝世界樹のしずく〟の原料にすることができます。
　もちろん、本物の世界樹の葉も、たくさんとってありました。
　なんと、例の問題児は、この温室で悪戯を始めました。
「うわあっ！　やめてくれえ」
　苗木を育てる係が悲鳴をあげました。
「グルル……」
　おいしそうな葉っぱがあると喜び、チビ竜は、あろうことか、せっかく下界から摘んできた成熟した世界樹の葉を、かたっぱしから食べてしまったのです。
「あああ……なんてこった！」

天空人たちは、へたへたと腰を落としました。

「なんでおまえはそう悪戯ばかりするのだ！」

ついに、マスタードラゴンが問題児を呼びつけました。

「よいか？　神竜族は、いずれは天上界におもむき、神々の仕事を手伝う大切な役目があるのだぞ」

重々しい声で、マスタードラゴンは説教をつづけます。

「わたしの言うことがわかったら、今後は絶対、悪戯をしてはいけないよ」

おとなしく聞いていたように見えた問題児は、突然口を大きく開きました。

「グルル……ボーッ！」

炎はマスタードラゴンに襲いかかり、立派な髭を焦がしてしまいました。

「な……なんて子供だ！」

さすがのマスタードラゴンも、あまりのことにかんかんに怒ります。

「かくなる上は、おまえを天空城から追放する！」

怒鳴られても、問題児は涼しい顔です。反省の色がまったくありません。

「よおし、おまえの竜としての力、命、姿の三つを取り上げる。か弱い生命しか持たぬ地上の生き物に姿を変えてしまうから、覚悟するがよい！」

これには、さすがの問題児もびっくりです。クンクンと甘えた声を出しますが、マスタードラゴンは許しませんでした。

「今後、おまえは新しい姿で善行を積み、いつの日か竜の力と命と姿を取り戻す時を待つのだ！」

ガラガラガラ！

とかーんっ！

マスタードラゴンの身体から放たれた電光に打たれて、チビ竜は気を失いました。

そして……。

ブランカの南東……ぎらぎらと太陽が照りつける、ここは砂漠のはずれ。

一頭の白い馬が、ふらふらと歩いています。

「あ、父さん！　あれを見て」
馬に気づいたのは、近くの宿屋の一人息子、ホフマンでした。宿屋の主人もじっと目をこらします。
「うむ、不思議なこともあるもんだ」
「こんな所に馬がいるなんて」
二人は馬の所へと急ぎました。
近くで見ると、その馬はとても美しい毛並みです。どうやら牝のようでした。
「迷い犬や迷い猫っていうのは聞いた事があるが、馬の迷子とはなぁ」
父の言葉に、ホフマンは目を輝かせます。
「ねえ、父さん、こいつ、家に連れて行こうよ！」
「しかしなあ……」
「ちょうどよかったじゃないか。父さん前から、買い物に行くのに馬が欲しいって言ってたじゃない」
「けど、ホフマンや。こんなきれいな牝馬だ。きっと飼い主が捜しているぞ」
「ま、飼い主が現れたら、その時に返せばいいさ」
ホフマンは白馬の鼻づらをなでて言います。
「な？　それまでおまえは、僕らの家族だよ！」
その言葉に、白馬は嬉しそうに鼻をホフマンにすりつけました。
「そうか！　僕の言ったことがわかるのか。いい子だいい子だ」
「本当にこいつは賢そうで、優しい目をしとるわい」
父親も目を細めてうなずきます。
「そうじゃ、名前をつけてやろう。女の子じゃから、何かきれいな響きがいいのう」
言われてホフマンは少し考え、やがてぱっと顔を上げました。
「パ・ト・リ・ン・ア……」
「ん？」
「パトリシアはどうだい、父さん？」
「ほう！　なかなかいい名前じゃないか」
父親が賛成してくれたので、ホフマンは微笑んで白馬の背中を叩きました。
「いいかい、おまえの名前はパトリシアだ。なかよくしような！」
パトリシア——竜の化身の白馬は、高らかにいななきました。

国境にかかる橋
──旅の詩人ロレンス──

AUTHOR AKI TOMATO ILLUSTRATOR HIDEAKI ITO

エンドールとボンモール、二つの王国の国境には、ヴハラという大きな橋がかけられています。この橋が、何者かの手によって破壊された事件をご存じでしょうか？
そう、あの選ばれし者たちが活躍した頃の話です。

「いやー、よかったよかった」
「これでエンドールも賑やかさを取り戻すぞ」
エンドールの城下町の人々が浮かれています。なにしろ、壊れたヴハラ大橋の工事が始まったのですから。
エンドールは元々、貿易がさかんな国でした。大きな港がありましたし、北には遙か数百年の昔からかかっている、巨木と石材でできたヴハラの大橋があり、そこを渡って旅人たちがやってきて、活気づいていたのです。

ところが。
いつの頃からか、海では魔物たちが暴れ始め、船はつぎつぎに沈没させられてゆきました。さらに、陸の要所ヴハラ大橋も何者かの手によって落とされてしまったのです。
それからというもの、この町は火が消えたようにさみしくなりました。訪れる人もないため、エンドール王ご自慢の国営カジノも閉鎖されるしまつです。
船はともかく、一刻も早く橋を修理することが必要でした。しかし、この時代随一の建築家ドン・ガアデが行方不明だったため、修理もままならなかったのです。
そのドン・ガアデが、やっとエンドールに到着したのですから、町の人々が大喜びするのも無理はありません。
「とにかく、めでてぇめでてぇ」
「なんでもガアデの親方を連れてきたのは、旅の商人らしい」
「おれが聞いた話じゃ、あのガアデって建築家はキツネに化かされてたっていうぜ。そいつをどっかの商人が助けたんだと」
そんなやりとりを、一人の男が眉をひそめて聞いていました。
しばらく前から町の宿屋に泊まっていたこの男、名をロレンスといいます。スマートな皮の鎧に身をつつんだ、なかなかの美男子です。
「く……せっかく橋を落として戦争を食い止めたのに……」
ロレンスは小さくつぶやきました。
と、いうことは――彼がヴハラ大橋を壊した犯人だということなのでしょうか？
もの静かで華奢に見える彼が、そんなすごいことをしでかしたようには、とてもじゃないが見えません。
「おっと、噂をすればなんとやら」
町の男のひとりが、閉まったままのカジノから出てきた人影を指さします。
「あれがガアデを救った商人だ」
ロレンスが見ると、商人らしいその太った男は、カジノによほど未練があるらしく、後ろを何度も振り向きながら、こちらに歩いてきます。
「まったく、知らぬこととはいいながら……余計なことをしてくれたものだ。一言文句を言ってやろう」
ロレンスは内心そうつぶやくと、太った男に近づいて声をかけました。
「ちょっと……商人さん」
「あ-？　わたしのことですかな」
太った男――トルネコはロレンスを見て首を傾げました。
「なにか用ですか？」
「建築家のガアデを助けたのは、あん

たですか？」

「助けたってほどのことはしてませんけどね」

照れ笑いするトルネコです。

「人を化かしていたキツネを追っぱらっただけなんですから」

ロレンスはトルネコをきっと睨み、周囲の人に聞かれないよう耳打ちします。

「あんたは良いことをしたつもりだろうが、あの橋が直ったら、とんでもないことになるんですよ！」

「ほう……？」

トルネコはちょっとびっくりしたように目を丸くしますが、にやりと笑うとこれまた小さな声で言いました。

「ボンモールの王様が戦争を起こすって話でしょ？」

「ど……どうしてそれを!?」

今度はロレンスが驚く番です。トル

ネコは悪戯っぽく片目をつぶると、懐から何かを取り出しました。
「そのことなら、心配ご無用」
と、筒のなかから一枚の紙を出し、ロレンスに見せます。
「これは……手紙ですか？」
ロレンスは眉を寄せて手紙を見つめます。しかし、書かれた文字があまりにも下手くそすぎて、読むことができません。
「ははは、やっぱり読めませんか。これはね、ボンモールのリック王子の手紙なんですよ」
「えっ!?」
「ここじゃあなんですから、酒場で一杯やりながら、いかがです？」
トルネコはそう言うと、先に立ってカジノの上にある酒場へ入って行きました。ロレンスはひとつ肩をすくめながら、何カ月か前のことを回想しました。

「ええい、黙れ黙れ！」
すごい剣幕で怒鳴っているのは、勇猛で知られるボンモール王です。
「しかし、王様……」
玉座の前にかしこまったロレンスは、それでも王に言い返します。
「せっかく良好な関係にある隣国へ攻め込むなどと……」
「うるさい！　詩人ごときに説教される筋合いはないわ！　おまえは密偵としてエンドールを探っていれば、それでよいのだ！　だいたい、行き倒れ同然で余の国へやってきたおまえを、誰が今まで面倒見てきたと思っているのだ！」
そう言われると口をつぐまずにはいられないロレンスです。
確かに二年前、このボンモールへやってきた時、ロレンスは重い病にかかっていて身動きもままならぬ状況だったのです。王はロレンスが旅の詩人だということを知ると、臣下に手厚い看病を命じました。そしてロレンスが完全に回復すると、彼にエンドール偵察を依頼したのです。
ボンモール王は、隣国エンドールへ攻め込もうと考えていたのでした。エンドールの貿易による収入と、国営カジノが上げる莫大な収益は、あまり土地の豊かでない内陸部のボンモールを治める王にとって、望んでも決して得られない物だったのです。
命の恩人のたっての頼みとあって、ロレンスはエンドールへおもむき、国の内情や兵力を探りました。
その結果、エンドールは平和そのものので、王様もお人好し、戦争を起こす気などまったくないことがわかったの

ボンモールに戻ったロレンスは、そのことを王に報告し、戦争をやめるように進言したのですが……。
「もうよい、下がれ下がれ！　余がエントールを攻めると言ったら、攻めるのだ。おまえの顔など見たくもないわ。今後一切目通りかなわぬからそう思えっ！」
王に怒鳴られて、ロレンスはやむなく引き下がりました。
「困ったぞ、なんとかしないとえらいことになってしまう」
自室に戻ったロレンスは、悩みました。彼には王の征服計画が、狂気のさたとしか思えませんでした。
「旅の空で耳にするのは、魔物が凶悪化したという話ばかりだ。今は人間同士が争っている場合ではないのに。さて、どうしたものか……」
考えあぐねていると、ドアがノックされました。
「こんな夜更けに……」
不審に思いながらロレンスはドアの内側で気配をうかがいます。と、聞き覚えのある声がささやきました。
「ロレンス、開けてくれ！　わたしだ」
「その声は、リック王子？」
ロレンスはあわててドアを開きました。周囲をうかがうようにして飛び込んできたのは、この国の跡継ぎリック王子、その人です。王子は父王とは違い、優しい性格で臣民から親しまれていました。
「王子、なぜこんな所へ……」
「詳しい話をしているひまはない。ロレンス、今すぐこの城を出るのだ」
王子は偶然、父王と宰相がロレンスを地下の牢屋に閉じこめてしまおうと話しているのを立ち聞きしてしまったのでした。
「君に頼みたいことがあったのだが、もう時間がない。早く！」
こうして王子にせかされて、ロレンスは間一髪でボンモールから脱出しました。
「……王子のおかげで命だけは助かったものの、どのみちこのままでは戦争になってしまう……」
ロレンスの足は、ひとりでにエンドールへと向かいます。国境のヴハラの大橋を渡り、エンドールの城下町まで半日ほどの距離までやってきました。
「やれやれ、もうすぐ日が暮れてしまう。でも、ここまで来ればもう大丈夫だろう」
一休みしようと、肩にしょっていた皮の盾を下ろした時です。
「……むっ!?」
ロレンスはとっさに近くの木の陰に

隠れました。旅の中でつちかわれた第六感が、彼に敵の存在を教えたのです。
「魔物か？　いや……」
そっとうかがうと、見たこともない巨大なものが二匹、近づいてきます。
「魔物なんかじゃない、こいつら正真正銘の魔族……それもかなりのつわものだぞ」
ロレンスとて、そんじょそこらの軟弱な吟遊詩人ではありません。若い頃から旅をつづけ、剣技ばかりでなく多少の呪文も会得していたのです。
だがその彼も、これほど強そうな魔族とは出会ったことがありません。小山のような赤褐色の巨体にまがまがしい棍棒を手にした魔族は、何事か真剣に話し合っている様子です。
「ふむ……よくよく見れば、力はありそうだが、あんまり賢いとはいえないつらがまえだな。よし、何を話してい

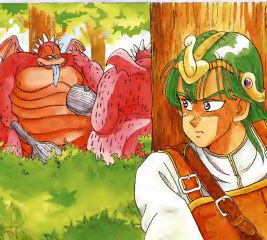
るのか聞いてみよう」

声には出さずにつぶやくと、ロレンスは自分が風下にいるのを確認してゆっくりと近づきました。

「……まったく困ったことになっちまったぜな、兄弟」

「ほんとだぜよ。威勢よく城を出てこまできたはいいけんど、人間どもがあんなにいっぱいいるとは考えてもみなかったぜな」

この二匹の魔物は、鬼棍棒の兄弟で、名はガンプとドンプといいました。このあたり一帯の国々を混乱させる使命を受けて、魔族の城からやってきたのです。

力は魔族の中でも一、二を争う鬼棍棒兄弟ですが、ロレンスがにらんだ通り、頭の方はからっきし。エンドールをはじめとする諸国の賑わいと、人間の数の多さに困りはてているのでした。

「百や二百なら、わしら二人でどうとでもなるけんど……」
「まさか、人間が千も二千もいるとはなー」
「しかし、魔王様をはじめ、一族郎党居並んだ席で、ああもはっきり約束しちまったし」
「まさか、人間の数が多くてどうしようもありませんでした、なーんて帰れないぜなあ」
鬼棍棒の兄弟は、柄にもなくため息をつくと、腰を下ろしました。
そしてその瞬間、ロレンスの頭に一つの計略が浮かんだのです。
「これがうまく行けば、ボンモール王のたくらみは一時なりとも阻止できる……」
ロレンスは一人うなずくと、チャンスを待ちました。
鬼棍棒どもはしばらくの間、ああでもないこうでもないと話していましたが、しょせん少ない脳味噌からしぼりだした考え、人間界を混乱させる名案が浮かぶはずもありません。
「んー、ふぁぁぁ……なんだか眠くなっちまったぜな」
「わ、わしもだ。考えるのはこれくらいにして、今日はもう寝るぜな」
と言ってごろんと横になったものの、やはり使命が気になるのか、なかなか寝つけない様子です。ロレンスはじりじりと二匹に近づくと、得意のラリホーを唱えました。
鬼棍棒どもは一瞬のうちに、深い眠りに落ち込みます。
「おまえたちは人間を困らせたいのだろう？」
耳元でささやくロレンスの声に、兄貴の方のガンブがうんうんとうなずきました。
「だったらいい知恵を授けてやろう」
「おー、おまえー、だーれ？」
ほとんど寝言といった感じのガンブ。
「誰でもいいだろ。いいか、よく聞けよ。ここから少し北へ行った所に、大きな橋があっただろう？」
「あ、あったー」
「あの橋をぶっ壊してしまえば、人間たちは大弱りだぞ」
「ほ、ほんとーかー？」
夢うつつでガンブが聞き返します。
「もちろんだとも。普通の魔族には無理だが、おまえたちなら橋を壊せるはずだ」
「うんうん、わしらー、力なら誰にも負けないー。けどー、どーやったら橋を壊せるー？」
眠ったままのガンブの言葉に、ロレンスは大きく深呼吸してからづつけました。

「左右の橋の脚を、同時におまえたちの棍棒で叩くんだ」

「うんうん。棍棒で叩くんだなー」

「いいか、同時にだぞ」

目覚めかけたガンブにもう一度ラリホーの呪文をかけ、ロレンスはそろそろとその場を離れました。

そして、翌朝。

「喜べ兄弟！　わし、寝てる間にすげえ作戦を思いついたぜよ！」

ガンブの話を聞いたドンブも、手を打って大喜びです。

「やー、さすが兄貴だぜな。おーし、さっそく橋をぶっ壊そうぜい！」

単純な鬼棍棒どもは、どすんどすんと橋へ向かいました。

「いいか兄弟、同時にこの橋の脚をぶっ叩くぜよ」

「おう！　まかしとき」

両岸から橋の下へと降りたガンブとドンブは、手にした巨大な棍棒をふりかぶりました。

「いち、にーの、さんっ！」

どーん！　ガラガラガラ！

すさまじい轟音とともに、橋の脚がぽっきり折れます。石と材木とが、雨あられと落下してきました。

「うわわっ、兄貴い、橋は壊れたけど、わしらはどーなるぜな!?」

「げー。そこまでは考えてなかったぜな……うわあああっ！」

崩れた橋の下敷きになって、哀れ鬼棍棒の兄弟は死んでしまいました。

エンドールの城下町についたロレンスは、しばらくして誰かがヴハラの大橋を壊したという噂を聞きます。ロレンスは、本当のことは自分の胸の中にだけ、しまっておくことにしたのです。

「なるほどね」

ちびちびと酒をすすっていたトルネコが、感心したようにうなずきます。

「このことは秘密にしておいてくださいよ」

ロレンスは笑顔を見せ、何杯目かのグラスを開けました。

「しかし、よかった……リック王子があんたに手紙を託してくれて……」

心から安心したように、ロレンスは大きく息をはきます。それを見たトルネコが言いました。

「ロレンスさん、あんたこれからどうするつもりだね？」

「さあ……また旅の詩人に戻りますか」

「それなら……」

トルネコは自分の旅と目的について話し始めました。

こうして、エンドールの一夜は更けていったのです……。

黄金の腕輪はいかが？
――オーリンの店――

AUTHOR AKI TOMATO ILLUSTRATOR NAOKO MORI

へい、いらっしゃい！　フレノールの町へようこそ。ここはみやげ物屋です。世界中を探しても手に入るのはここだけ！　っていう、珍しい品物がいっぱいですぜ。どーですか、こいつなんかお子さんのみやげにはぴったり。〝ミノーンもなか〟ってゆーんですがね。いや、本当のミノーンをお菓子にしたんじゃねえですからご安心を。形がそっくりでやんしょ？　堅い殻の中には、甘ぁいアンコがたっぷりと……。

なに、お気に召さない？　んじゃ、こいつぁーいかがです。かつて、あの勇者さまを助けて戦ったという、サントハイムのアリーナ姫のサイン色紙！　お値打ちもんですぜ、絶対！

なに、本物かですって？　いやー、そういわれると、その……もごもご。

うーん、わたしがアリーナ姫にお会

いしたことがあるってえのは、正真正銘、間違いねぇんですがね。サインをもらったかっていわれると困る……あ、いけね。ついバラしちまった。へいへい、こいつぁー本物じゃねえですよ。すんませんねぇ。

それじゃ、お客さん、とっておきのやつを。え？　何です？　商売が下手だって？　うーん、まいったなあ。なになに、そんないい身体してるんだから、なにも商人になるこたぁないってんですかい？

お客さん、口が達者だねえ。お世辞いったって何も出ないよ。なに、本当に強そうだと。

へへ、そりゃまあ、こう見えても若い頃は結構、力自慢でしたからね。知ってますか、昔、キングレオって土地にいたスライムの化物。なになに、スライムはみんな化物だろってゆーんですかい。

いえいえ、地名に合わせたわけでもないんでしょうけど、キングレオのあたりにゃあ、こーんなでっかいスライムがいましてね。いや本当。わたしはそいつをこう、鉄の槍でグサーっと。

ま、昔の話ですけどね。

いやいや、私は戦士だったわけじゃありませんよ。ははは、よくそういわれるんですけどね、違うんです。

わたしの昔の商売……わかりますか？　よーし、お客さん、もし当てることができたら、この店の品物どれでもひとつさしあげましょう。嘘じゃねえですぜ。

なに、武闘家？

ブー。はずれ。いやー、そんな荒っぽい商売じゃなくて、もっとこう、知的なやつだったんです。

へ？　知的な職業の人間に筋肉がいるのかって？　そこはそれ、なんつーか文武両道ってやつでね。

は？　神官ですって？　なるほどねー、確かに神官なら、鉄の槍を使えますねえ。でも違うんです。だいたいわたしは、魔法ってのがからきし駄目な方でして。ホイミのひとつでも覚えられれば、ずいぶんと生き方が変わっていたでしょうねえ。

あー？　なんですって、盗賊ぅ!?　馬鹿なこと言わないでくださいよお客さん。痩せても枯れても男一匹、人様の物を盗もうなんてえ腐った性根は持ち合わせてませんぜ。まぁ、カギのかかった扉をぶち破ったことはありますけど。へへ、昔は今よりもっと、力があったもんでね。

どうです、お客さん。もう降参ですか？　残念だなぁ、おみやげがただで手に入るところだったのに。

んじゃ、教えてあげましょうかね。
じつはね、わたしは若い頃、錬金術師だったんですよ。そう、いろんなものを合成したりして金を作り出す、あの錬金術師。どーです。たいしたもんでしょ。
え、とても信じられないって？
うーむ。困ったなー。へへ、正直に言うと、錬金術師の卵・・・っていうか、弟子だったんですよ。
わたしの師匠はエドガン先生といいましてね、さっき言ったキングレオ地方の南にあるコーミズって村に研究所を構えてた、それは立派な方でした。
どんな修行をすれば錬金術師になれるか、ですって？
まいったなー。実はわたし、勉強らしい勉強はしてないんですよ。先生が研究に使う鉱石を砕いたり、金属を溶かす炉に石炭をくべたり。・・・つまり助手っていうのはそういう仕事をしてたんです。
ね。何でこんなに筋肉がついているかわかるでしょ。錬金術ってぇのは、けっこう肉体労働が必要なんですよ。
いやー。今から思うと、あの頃は本当にいろいろなことが起こりましたよ。
尊敬してやまない師匠のエドガン先生ですが、殺されてしまいましてね。
しかも、犯人がなんと、わたしより後から入門した弟子のバルザックって男だったんです。バルザックはもともと、悪い目的で先生に近づいていたんですねえ。
もちろん、わたしは先生の仇討ちをしようと頑張りましたよ。ところがです、バルザックの野郎、邪悪な力でモンスターになりやがってね。そう、さっきお話ししたキングスライムなんざ問題にならないくらい強い奴に。それでも、わたしは戦いを挑みました。
いえ、ひとりだけで戦ったんじゃありません。
そうそう、お客さんには先生のお嬢さん方のことはまだ話してなかったですね。

師匠のエトガン先生には、それはきれいなお嬢さんが二人、いましてね。お姉さんがマーニャさん、妹さんがミネアさんっていいました。

いやもう、二人ともすげぇべっぴんさんでしたよ。マーニャさんは踊り娘で、ジプシーの舞をやらせたら天下一品。色っぽいのなんのって。しかもメラとかギラとか、攻撃魔法の使い手でしてね、こう、見事な肢体をくねらせて呪文を唱えることなんざ、本当、千両役者って感じでね。

ミネアさんの方は、お姉さんとは対照的にもの静かな方でした。静かというより、神秘的ってんですかね。占いの名人で、よく当たると大評判だったんですよ。剣技の方もなかなかの腕だし、ホイミとかの治癒魔法もお手のもの。マーニャさんとのコンビネーションは絶妙でしたね。

で、わたしはお二人と力を合わせてバルザノクを追いつめたんです。

え？　仇は討てたのか、ですって？

そりゃまぁ、ご想像におまかせしますよ。討てたと言えば討てたし、失敗したともいえるし――。わたしはお嬢さん方を逃がすために命を張って……。

何のことかよくわからないってんですか？　ま、いいじゃないですか。現にわたしが今こうして、生きて商売をやってるってことから察してくださいよ。

ははは、こりゃうっかり長話をしちまったようですね。すみませんねお客さん。

ね、つまんない昔話につき合わせたお詫びといっちゃあなんですが、とっておきの品物を儲けなしでお譲りしますよ。

どうです、この腕輪は。

立派なもんでしょう。そう、これぞ世にも名高い黄金の腕輪！

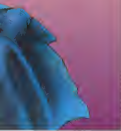
ったって、もちろん複製ですけどね。実は銅の腕輪に金箔をかぶせたものなんですが、なかなかのもんでしょ。金箔をこれだけきれいに貼れる職人なんて、めったにいませんぜ。へい、もちろんわたしが細工したものです。

この技術は、わたしがエドガン先生から学んだ唯一の錬金術を応用したものなんです。デザインも、本物の黄金の腕輪とは違えてあるんですよ。誰かが本物と勘違いしてどっか遠くの街へでも持って行ったら、騒動になるかもしれませんからね。

ほら、よーく見てください。

ここの所にちっちゃく、女の人の顔が二つ、彫ってあるでしょ？

右がマーニャさんの、そして左がミネアさんの彫刻なんです。

え？　もしかしてわたしが、この二人のどちらかに惚れていたんじゃないかって？

「ははは っ！　よしてくださいよお客さん。それこそ、とんでもない！　あのお二人は並の男がたちうちできるようなお方じゃありません。それに、へへへっ。

わたしには愛する女房が、ちゃーんといるんです。なんたってうちのカミさんは、わたしの命の恩人なんですよ。悪い奴らにやられて死にかけていたわたしを、必死で助けてくれたんですから。そりゃーもう、気立てのいい女ですよ。わたしにゃあできすぎた女房だと思ってます。

おっといけねぇ、また昔話になるとこだった。

さあ、どうですお客さん、この腕輪。どーんとお安くしますぜ。フレノールみやげには、最高だと思うんですがねぇ。

へい！　まいどっ！

三国一の用心棒
戦士スコット

AUTHOR AKI TOMATO ILLUSTRATOR HIDEAKI ITO

ここは、エンドールの城下町。様々な人が訪れる、この大陸最大の都です。賑やかな目ぬき通りの外れ、教会の前に、一人の戦士が立っていました。

屈強な身体に、手にした鉄の槍がよく似合います。眼光鋭くあたりを見回す様は、なかなかたのもしげ。ですが、その表情はどこか虚ろなのです。覇気というものが感じられません。

「うーむ……それにしても腹が減ったなぁ」

戦士にあるまじき情ない台詞を口にしたこの男、名前をスコットといいます。こう見えても、数カ月前まではエンドール王お抱えの、れっきとした近衛兵でした。

「やれやれ、なんとかして新しい職を見つけんと、日干しになってしまうぞ。……かといって、拙者には戦士以外の仕事はできんからなぁ」

どうやら彼は、現在は失業中の身のようです。磨きあげられた青銅の鎧に皮の盾、と見かけこそ立派ですが、ただのプータローといったところでしょうか。

「おっ!! 見かけぬ男だな。旅の商人らしいが……」

通りを眺めていたスコットは、ひとりの旅人に近づいて行きました。

「ふむ、なかなか格幅もいいし、金も持っていそうだ。……よし、雇ってくれるかどうか尋ねるとするか」

スコットはうなずきながら咳払いをひとつ。

「あー、ゴホン。そこの商人どの」

突然声をかけられた旅の男は――ご存じ、トルネコでした。トルネコはスコットを、まるで品物を見定めるような目で眺めると、愛想良く微笑んで対応します。

「ほうほう、なるほど。あなたはこの国一番の戦士で、しかも用心棒というわけですか」

「さよう。しかしですな、拙者の腕前はこの国一番なんてものではありませんぞ。数多くの戦士を擁すると言われるバトランドはともかく、近隣のボンモール、ブランカを合わせても、まず拙者以上に腕の立つ者はいまい」

スコットは自慢げにひげをなでてつづけました。

「言わば、三国一の用心棒ですな。ははは!」

「ほう、それはたのもしい。で、わたしに何かご用ですか?」

「あー、拙者はこの国の商人のために、様々な人助けをやってまいったが、ゴホン。用心棒稼業も近頃いささかマンネリ気味でな。貴公をなかなかの商人どのとお見受けして声をかけたと、ま、そういうことなのだよ」

「これはこれは、恐れ入ります」

これは、食いつめた浪人が職を求めてきたのだな――と内心思うトルネコですが、そんなそぶりは少しも見せず、スコットの話を聞いています。

「いや、あなたがかなりの使い手だということはわかりました。今までも、さぞやいろいろな冒険をなさったり、手柄を立てたりしたのでしょうなあ」

トルネコに水を向けられたスコットは、ここが売り込むチャンスとばかりに自己PRを始めます。

「うむうむ、そうさな。拙者あまり自慢話はしたくないのだが、その手の話なら山のようにありますぞ。ほれ、この町のカジノに、魔物同士を戦わせる格闘場があるのはご存じであろう」

「はい。残念なことに、今は閉まっているようですね」

「以前は、それはもう人気の娯楽場だったのだ。そこから魔物が逃げ出したことがあってな」

「それはまた物騒な話ですなあ」

「だろうが。それを拙者がひとりで取り押さえたのだよ。ははは」

スコットの鼻が自慢げにひくつきます。トルネコはしかし、スコットの目が妙に落ち着きがないのを見逃がしませんでした。

「たいしたものですなあ。どんな事件だったのですか？」

「んー……いや、それはだな」

事の起こりは、一年前……。

「バカヤロー！　このスロットマシンは、インチキいかさまのコンコンチキだあっ！」

だいぶ酒が入っているらしい男が、カジノの機械を蹴飛ばして、従業員に注意されました。

カジノで一番問題なのが、こういう客です。

つまり。

上の酒場で一杯やる――気が大きくなる――カジノで無茶な賭け方をする――スッカラカン――怒って暴れる。

エンドールにカジノができて以来、いや、世の中に賭事というものが生まれて以来、えんえんと繰り返されてきたことが起こったのです。

この男のように、スロットマシンで負けたら、機械にやつあたりします。

ポーカーで負ければ……これは当然、カードを配るディーラーに文句を言うでしょう。

それでは、様々なモンスターが登場して戦い、勝ち残るものを予想する格闘場で負けまくったら？

気が荒く、酒も入った男が格闘場で大損をしたら、いったいどうなるのでしょう。

「えーい、このすっとこどっこいっ！　コイン20枚も賭けてやったのに、なんだそのざまはっ！」

まともな人間なら、魔物に文句を言ったりはしません。しかしなにせ、酔っぱらいのやることなのです。

「やいこら、土わらしふぜいに負けやがって。恥ずかしくないのか！　てめえそれでも暴れ牛鳥か!?　ほんとうは豚鳥なんだろ。ええーっ!?」

からまれた魔物も、いい迷惑です。試合に負けて怪我をした上、酔っぱらいにいいように言われたのでは、魔物でなくたって怒りますよね。

「グルルルルル！」

檻の中の魔物が怒れば、外の酔っぱらいもますます腹を立て――。

その騒ぎに気づいたのが、スコット

でした。

「むむ、いったい何が……？」

と、従業員や客が悲鳴をあげているではありませんか。

「た、たいへんだーっ」

「檻から魔物が逃げたぞっ！」

「たすけてー」

「もちろん拙者は、逃げた魔物と戦ったのだ！」

スコットはトルネコ相手に、身ぶり手ぶりで自分の活躍をアピールします。

「魔物をかたっぱしから捕まえて、右に左に縦横無尽。ちぎっては投げ、むんずとひっとらえ……」

腕を組んで聞いていたトルネコは、首を傾げて尋ねました。

「なるほど。あなたのお手柄はよーくわかりました。……でも、なんだって魔物が逃げ出したんです？　檻に見張

りがついてなかったんですかね？」
　スコットの顔が、いくぶん青ざめました。
「つまり、その―、なんだ……けしからぬ話ではあるが、カジノの警備をしているはずの兵士が、ゲームに夢中になっておってな。酔った客が檻に近づいたのがわからなかったんだよ」
「とんでもない職務怠慢ですなあ。当然、その兵士は首になったんでしょ？　確かカジノの警備は、エンドール城の戦士が担当することになっていたのですよね」
「そうなんだ」
　スコットはやや肩を落として言いました。
「その時の警備員は、普段は王様の近衛兵をやっている男でな。たまたま友達に頼まれて、警備を引き受けたらそのありさま。いやはや、運が悪いというか……当然、城勤めも首になったよ」
「なるほどねえ」
　顎をてのひらでなでながら、トルネコはうなずきました。
「それ以来、スコットさんは用心棒稼業をつづけておられるわけですな」
「そう、それからずっと……」
　そこまで言って、スコットははっと口に手を当てます。
「な、なんで今の話が拙者のことだとわかったんだ!?」
「ははは、あなたの話してる様子を見れば、誰だってわかりますよ」
　そう。この事件が原因で、スコットはプータローになってしまったのです。
　一年前の、ある日のこと……。
「なぁスコット、きみは今日は非番だったよな」
　国営カジノの警備役をしている同僚が、休みたいのでかわりに仕事をしてくれ、と頼みにきました。スコットはその頃、エンドール王に仕える近衛兵でしたが、友達の頼みとあらばしかたありません。
「来たぞー、カジノの警備は。適当にブラブラしてればいいんだから。な、頼まれてくれよ」
　頭を下げられたら嫌とは言えない性格のスコットは、やむなく警備を引き受けました。
　国営カジノには、当然、多額の現金が集まります。10000ゴールドや20000ゴールドといった、普通の庶民には縁のない金が動いているのです。金やカジノで使われるコインは大きな金庫に厳重に保管されていて、めったなことで開けることはできません。
　それでも、真面目なスコットは、怪しい奴がいないかと目を光らせていま

した。

「なにしろ強盗にでも入られたら、一大事だからな……」

鋭い目つきで巡回しますが、カジノの中は平和そのもの。そのうち、さすがのスコットも退屈になってきました。

そのうえ、カジノの支配人が、

「いやー、いつもの兵隊さんと違って、あんた真面目だねー。でも、そんな怖い目つきで場内を歩かれたんじゃ、お客が安心して遊べないよ。ま、今日のところは適当に遊んでいきなさいな」

と、ゲーム機械を指さします。

「ふーむ、そう言うのなら……」

普段から真面目で、賭事などに縁がなかったスコットです。初めてのギャンブルに、すっかり夢中になってしまいました。

「ぬおおおおっー　なんでこうダブルアップがうまくいかないんだあっー」

「ええい、もうひと勝負っ！」
どうやらスコノト、カードの才能はないようです。いいかげん負けて格闘場に行けば、
「なな、なんとっ！　ここでサンドマスターが勝ってしまうとは!?　残念無念、もういっちょ賭けるぞ！　次の勝負はポイズンリザートで決まりだあ！」
なんて、その日の格闘場は大荒れで、穴ばかりが続出しています。スコノトはつい熱くなって、手持ちの金をつぎつぎにコインに変えてゆきました。
負けがこんでいる時は、何をやっても勝つことができないものです。最後の勝負、とスロノトマシンをやってみても……。
「それそれ、もう一つ7だ！　7が三つ揃いさえすれば――ああっ！　なんでこんな時にサクランボがぁぁっ!?」
悲惨なものです。
「ああ、天は拙者を見放したか……」
スコットはため息をつくと、財布を見ました。城の給料日を三日過ぎたばかりだというのに……財布の中身はすっからかん。
「うーむ、こりゃ給料の前借りでもせんと、今月は暮らして行けんじゃないか。拙者には博打の才能というのが、からきしないみたいだなぁ……」
と、後悔するスコノトが聞いたのが、格闘場から逃げ出した魔物に驚く人々の悲鳴だったのです。
「……」
「いやいや、そんなにがっかりしないで」
がっくりと肩を落としたスコットの姿が哀れに思ったのか、トルネコが話題を変えます。
「で、用心棒としては、どんな仕事をなさったんです？」
「お……おう。最初に拙者が雇われたのは、この国一番の貿易商人でな」
元気を取り戻したスコノトは、何とか自分を認めてもらおうと、前にも増して熱っぽく話し始めました。
「よろしいかな、スコノトさん。この倉庫に入れてある品物は、遠くソレノタから輸入した高価なガラス食器。ちゃーんと見張っていてくださいよ」
寝ずの番に立つスコノトに、雇い主の貿易商人が言いました。実はその頃、ボンモール近辺を荒らし回った盗賊団が、このエンドールにやってきたらしいという噂が流れていたのです。貿易商人は万一のことを考え、スコノトを雇ったのでした。
その心配は、不幸にも的中しました。

夜遅く、貿易商人の倉庫に盗賊団が押し入ったのです。

「いやあ、その時の拙者の活躍！　トルネコどのにも見せたかった」

確かにその戦いでのスコノトは、まさに鬼神もたじろぐほどの働きでした。二十数人の盗賊を相手に、大立回りを演じ、ついに全員をお縄にしたのです。

「ふむふむ、それは勇ましい」

トルネコはさも感心した様子でうなずきます。が――。

「しかし、さっきのお話では、倉庫の中にあった、盗賊団が狙ったものは、ガラスの食器だったんでしょ？　そんな大騒ぎがあったら、無事じゃすまなかったのではないですか？」

スコットの顔色が、またも変わりました。

「うーむ、実はそれが問題だったのだ」

盗賊は見事捕まえましたが、倉庫の中での大立回りの結果、貴重なガラス食器はほとんど壊れてしまったのです。

「まったく、ボンモール国から盗賊を捕まえた褒美の金が出なかったら、どうなっていたことやら……」

スコットはまたも大きなため息をつきました。どうやらこの戦士、腕は立っても頭の方はそれほどでもないようです。

「こんな拙者じゃ、やはり雇ってもらえんだろうなあ……」

すっかりしょげ返ったスコットに、トルネコは笑顔を見せます。

「いえ、あなたは腕も立つし、何より善人だ。よければわたしの用心棒になってください」

「ほ、本当ですか⁉」

トルネコが大きくうなずくのを見て、スコットは目を輝かせました。

「ありがたい！　いやあ、貴殿と一緒なら、たとえ北の洞窟だろうとどこだろうと行きますぞ！」

「北の洞窟？」

トルネコは片方の眉毛を上げて、スコットを見つめます。

「うむ。ここからだいぶ離れた北の山にある洞窟に、すごい財宝が隠されているという言い伝えがあるのだが……」

「スコットさんは、あそこに行ったことがあるのですか？」

「行ったもなにも！　あそこへ入って生きて戻ったのは、この拙者くらいのもんでしょう。中は迷路になっていて、おまけに魔物がわんさか出る。その上、地下二階には縦横に水路が走っていて、小舟でもないと移動できんのです。いやまったく、宝どころか命があっただけでめっけもんですぞ」

スコットの言葉に、トルネコはしばらく考えを巡らせているようでした。

「ま……ともかく、一度でも入った人がいるとは心強い」

「へ⁉　それじゃトルネコどのは、まさかあの洞窟に……」

「はい。あなたがおっしゃった、すごい財宝というやつをぜひ、手に入れようと思いましてね」

「そ、そんな……またあそこへ行くなんて……」

スコットは酸欠の金魚のように、口をぱくぱくさせています。

「でもあなた、北の洞窟だろうとどこだろうと行くって、今おっしゃったじゃないですか。まさか戦士に二言はないでしょう？」

こうまで言われては、しかたありません。

「……よし、いいとも！　戦士スコット、失業しても貧乏しても、誇りだけは失っておりません！　約束通り、いずこなりともおともしますぞ！」

こうして――。

王国一の用心棒は、トルネコの仲間となったのです。

神竜族の養育係
——ルーシアとドラン——

AUTHOR AKI TOMATO ILLUSTRATOR TAKUMI YANO

ここは、天空城。幼いドラゴンたちの養育係の一人ルーシアは、このところ浮かない顔をしていました。

あまりの悪戯のひどさにマスタードラゴンによって馬に変えられたチビ竜のことも心配でしたが……。何より、チビ竜たちの腕白ぶりが、一向に治まらないのが原因だったのです。

「ほらほら！　そんな雲のはじっこに行ったら危ないでしょ！」

いくら強靱な身体の神竜族とはいえ、しょせんは子供。背中の翼はまだ小さくて、ルーシアたち天空人のように飛べるわけではないのです。ここ天空城のある雲の上から落ちたら、ただではすまないでしょう。ですが、だからといって以前のようにチビ竜たちを城の中で遊ばせるわけにもいきません。

馬に変えられた問題児の一件以来、チビ竜の遊び場は城の外と決められて

いたのです。
親の心、子知らず。なんて言いますが、外で遊ぶようになったチビ竜たちは、前にも増して元気一杯。中でも、ドランという名のチビは、それはもう手がかかってしかたありませんでした。
もともとドランは、あの問題児と並ぶ悪戯好きだったのです。
「ドラン！　危ないって言ってるのにっ！」
ドランはよほど雲の上が気にいったのでしょう。ルーンアがはらはらする目の前で転げ回っています。
「ああ……こんな調子じゃ、いつかあの子、落っこっちゃうわ」
ルーンアの不吉な予想は、ふくらむばかりでした。
「そうだ。万一のことがあっても、世界樹の葉があれば助かるんだっけ！」
ひと安心したルーンアですが、ふと思い出して眉をひそめました。
世界樹の葉は、馬に変えられた問題児が、あらかた食べてしまったのです。
「まだ残りがあるのかしら……」
心配になったルーンアは、世界樹の葉を保管してある温室に行ってみることにしたのです。
「いいこと？　あなたたちはここでおとなしくしているのよ」
チビ竜たちが、ルーンアの言葉に神妙にうなずくので、同僚の養育係たちもほっと息をつきました。
しかし。
養育係たちが安心してお喋りに花を咲かせているすきに、一匹のチビがそっとルーンアの後を追って抜け出したのです。
そう、ドランでした。ドランはとても甘えん坊で、ルーンアによくなついていたのです。
ドランが城の中に入ったとは知らないルーンアは、温室に入って行きました。
「ねえ、まだ世界樹の葉って、あったかしら？」
「うーん、こないだあの問題児がだいぶ食っちまったからなあ。ちょっと待っとくれ」
世界樹の苗木を育てる温室係は、頭をかきながら引き出しを開けました。が。
「しょうがないなあ。残りは二枚しかないや」
温室係は腕を組んで、ルーンアに文句を言います。
「おまけに、そのうちの一枚は半分、かじられてる。まったく、あんたら養育係がしっかりしてくれないから、こんなことになるんだよ」
「……ご、ごめんなさい」

「わかってんのかねぇ、世界樹の葉を摘んでくるのは、そりゃもう大変なんだよ」

もちろん、ルーシアだってそのことは承知しています。なにしろ成熟した世界樹の木は、地上界にたった一本しか生えていないのですから。

ルーシアが申し訳なさそうに頭を下げるのを見て、温室係はさらに文句をつづけます。

「それに、僕の仕事だって手が放せないんだ。世界樹のしずくが取れるまで苗木を育てるってのは、すごく手間がかかるんだ。だから僕は、めったに地上には降りられないんだぜ」

そう言われると、しゅんとしてしまうルーシアです。

そんな時。

「グルル……？」

温室の入口から顔を出したものがいます。

「ド、ドラン！　どうしてここへ!?」

ルーシアはびっくりして振り返りました。

「あっ！　このやろー、また悪さしにきやがったな！」

温室係は眉を吊り上げて叫びました。

「ごめんなさい、今すぐ連れて帰りますから」

「えーい、そうやって甘やかしてばっかりだから、チビどもがつけ上がるんだ！」

手にしたほうきを振り上げて、温室係はドランに歩み寄ります。

「あ、やめて！」

あわてて止めようとするルーシアを振り払って、温室係はドランを殴りつけようとします。

「グルルル……！」

しかし、いくらチビとはいえドランは神竜族。

ボーッ！

とばかりに炎を吐きました。大好きなルーシアがいじめられているとでも思ったのでしょうか。

「うわわっ！」

温室係はすんでのところで炎をかわしました。

しかし。

ボボボボ！

「あああっ!?」

ドランの吐いた炎は、温室係とルーシアの間を抜け、二人の後ろにあった引き出しを燃やしてしまいました。

その中にはたった二枚、いや一枚半だけ残った、世界樹の葉が入っていたのです。

当然、貴重な葉は黒焦げです。

「なな、なんてこった！」

温室係はカンカンです。

「残りはこれだけだって言ったばかりじゃないかっ！」

「ごめんなさいっ！　必ずあたしが何とかしますから！」

ルーシアはまだ興奮の収まらないドランを引きずるように温室を出ました。

「まったく、おまえはなんてことをしてくれたのよ！」

トランはわけがわからず、首をかしげます。

「いいっ!?　これでもし、ドランたちが雲から落っこちても、命を助けることができなくなっちゃったのよ！」

そう怒られてようやく理解したのか、トランはしょんぼりとうなだれました。

「ともかく、すべてはあたしの責任よね」

ルーシアは必死で、どうすればいいのか考えました。

「そうだ。こうなったら、あたしが地

上に降りて、世界樹の葉を摘んでくるしかないわ」

しかし、です。

天空人がむやみに下界に降りることは、マスタードラゴンによって禁じられているのです。唯一許可されているのが先程の温室係ですが、彼にしろめったなことでは地上に降りません。

ルーシアがこれからやろうとしていることは、厳罰に値するのです。

それでもルーシアの決意は、固いものでした。まず、天空城の用務員をしているホビットに相談しました。

「……というわけで、少しの間だけ、あたしのかわりにドランたちの面倒を見てやってほしいの」

「おいおい、考え直せよ。規則で城を離れちゃいけないことになってるのを、あんた知らないわけじゃないだろう」

ホビットはなだめるように言いました。

「だけど、あの子たちがもし、雲から落ちちゃったら……」

ルーシアのチビ竜を思う気持ちは変わりません。

「そこまで思いつめてるなら、しかたない」

ついにホビットの方が折れました。

「けど、一日以内に戻ってきてくれよ」

「ありがとう！」

ルーシアは翼をはためかせ、密かに天空城を抜け出しました。

ところが――。

約束の一日が過ぎても、二日たっても三日たっても、戻って来なかったのです。

「ああ、何かあったんだ……」

ホビットは気が気ではありません。

「うーん、こうなったら、おいらも罰を受けるだろうけど、しかたない」

ホビットは意を決してマスタードラゴンに面会を申し入れました。そして、ルーシアが無断で世界樹の葉を取りに行ったこと、まだ戻っていないことを話し、彼女を捜してくれるように頼んだのです。

「ふむ……よくぞ正直に打ち明けてくれた」

叱られるのを覚悟していたホビットに、マスタードラゴンは優しく語りかけました。

「だが、おまえは一つ忘れておるぞ」

意外な成り行きに、ホビットは目を白黒させます。

「わたしは、ここにいながらにして、この世界のすべてを見ることができるのだよ」

そうです。竜神マスタードラゴンは遠く世界の果てで起こったことも、天空城の中で知ることができるのです。

「ルーシアのことは、案ずるな。いずれ無事に戻って来る……」

神々からこの世界を託されたマスタードラゴンは、目を閉じると歌うように言いました。

「――すべては、定め。地上に落とされし竜が白馬になりしことも、神竜族の子が雲の上で戯れしことも――また、心優しきルーシアが、子供たちを想い世界樹に向かいしことも――すべては定め。だが、その果てに――定められし者、導かれし者たちの軌跡がこの城で交わった後――どのようなことが待っているのか――定めの終わりにどんな苛酷な戦いが待っているのか――それは、わたしにも見通せはしないのだ……」

きょとんとしているホビットの前で、マスタードラゴンは眠りにつきました。明日を、見るために……。

PLAY LAND

プレイランド

DRAGON QUEST

ドラクエ

アトラクションメニュー

ドラクエIV熱中度は？

やれば、やるほど新しい発見があるドラクエIV。さてキミはどのくらいドラクエマニアといえるんだろうか？　ゲーム編、生活編に分けた40のチェック項目でキミにあてはまるのはいくつあるかな。その合計がキミのレベルだ。さぁ、キミはドラクエ博士になれるかな!?

ゲーム編　クリア・レベルチェック

キミはドラクエIVにどこまではまったか!?　隠された謎や情報は、すべて知りつくしているか？　これはドラクエIVマニアの基本だ！

- □ドラゴンクエストI・II・III・IV、すべてクリアーしている。
- □小さなメダルを32枚全部集めた。
- □10人パーティーを作ってみた。
- □キャラクター全員をレベル99にした。
- □すべての呪文の効果や消費MPを知っている。
- □パルプンテの効果を20種類以上知っている。
- □モンスターの名前を50種類以上言える。
- □銀のタロットの枚数を知っている。
- □炎の爪はもちろん取ることができた。
- □ホイミンを仲間にしないで、一章をクリアしてみた。
- □三章でロレンス・スコットを仲間にしないでクリアしてみた。
- □銀の女神像を取らないで三章をクリアしてみた。
- □四章のバルザックを静寂の玉を使わないで倒した。
- □スロットでスリーセブンを出したことがある。
- □ポーカーでロイヤルストレートフラッシュを出したことがある。
- □昼にモンバーバラの劇場でお金を拾った。
- □バロンのつの笛を使わずにクリアすることができた。
- □はぐれメタルの武器、防具は全てそろえた。
- □勇者は男・女の両バージョンでやってみた。
- □ゲームをクリアしたレベルは、全員レベル45以下だ。

LV10〜25　ファン

このレベルのキミは、ごくフツーのドラクエファンだ。きっとドラクエIVも1回しかクリアしてないと思う。しかし、ドラクエはまだまだ奥の深いゲームだ。再度プレイし直して、「マニア」「博士」をめざそう。

LV9以下　フツーのユーザー

まだ、キミはドラクエのおもしろさを十分に理解していないかもしれない。友だちや雑誌からもっと情報を仕入れてもう一度プレイしてみると、きっと新しい発見があるぞ。

ドラゴンクエストⅣ スーパーマニア度チェック

キミの

生活編 デイリィライフ・レベルチェック

日常生活までもドラクエⅣで頭がいっぱい。ドラクエⅣ世界につかりまくっているキミに、これはマニアを超えたビョーキ度チェックだ！

- □今度、生まれ変わるとしたら、勇者以外考えられない。
- □サランの町にいるマローニの詩に曲をつけた。
- □100m走の時、すばやさの種があればといつも思う。
- □朝、起きる時、母親にザメハの呪文を唱えてもらっている。
- □次の日が待ち遠しい時、ラナルータを唱えたことがある。
- □ドラクエⅣは根性で発売日に買った。
- □公式ガイドブックは上巻・下巻とも、持っている。
- □寝言で呪文を口走ったことがある。
- □知らないうちに、ドラクエの曲を口ずさんでいる時がある。
- □変化の杖みたいなアイテムはぜひほしいと思う。
- □学校から帰る時、ルーラの呪文があればと思う。
- □友達3人で歩いていると、つい、タテ1列になってしまう。
- □つぼの中、タンスの中をすぐ調べたくなる。
- □朝起きるとまずドラクエがしたくなる。
- □ドラクエ4コマに応募したことがある。
- □ドラクエのプロデューサーの名前を知っている。
- □馬車に乗ったことがある。
- □友だちにドラクエキャラのあだ名をつけた。
- □自分のまわりはドラクエワールドグッズでいっぱいだ。
- □馬のふんを踏んだことがある。

LV35以上 博士

すごい！ すごすぎる!! ここまでハマッてしまうとは!! キミの集中度と熱意には頭が下がる。将来は、芸術家か学者を目指せばきっと大成することうけ合いだ。ここまで極めたキミにはドラクエ博士の称号を与えよう。

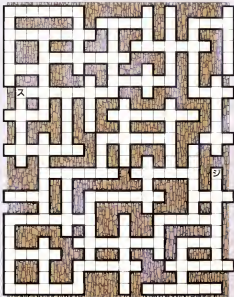
LV26〜34 マニア

1回や2回のクリアではなかなかここまではいかない。キミは立派なマニアと呼べるだろう。しかし見よ、上には上がいるのだ！まだまだ研究を続けて、いずれ博士号を極めるための努力はおこたるな！

パズルダンジョンの

Monster（モンスター）を倒せ！

ス

ジ

★解答は141ページにあるぞ！★

●スケルトンの解き方

ス	タ	ン	シ	ア	ラ		
	カ				ナ		
	ラ			ト	ル	ネ	コ
	ノ		ギ		ー		
	チ	カ	ラ	ノ	タ	ネ	
	ズ						

ギラ
トルネコ
ラナルータ
スタンシアラ
チカラノタネ
タカラノチズ

まず言葉とマス目の字数から、あてはまる言葉を入れる。次に文字のつながりから、他の言葉もあてはめていく。

「ガイコツ剣士」というモンスターがいるけど、これは、ことばを骨にしてガイコツのようにつなげた、「スケルトン」というパズルだ。

このパズルダンジョンには、多くの手強いモンスターがかくれている。キミはできるだけ早く、すべてのモンスターを探し倒さねばならない。解答にかかった時間でキミの勇者としてのレベルがわかるというものだ。

グズグズしているひまはない。さあ、今すぐ挑戦しよう。

モンスターリスト

●3文字
カロン
コドラ
ベレス
●4文字
イエテイ
オーガー
スライム
ツカイマ(使い魔)
トドマン
ハンババ
ヒクシー
マネマネ
ミノーン
ミミック
●5文字
カマイタチ(かまいたち)
サブナック
ツチワラシ(土わらし)
ハエオトコ(ハエ男)
バラクーダ
ブルホーク
●6文字
オオニワトリ(大ニワトリ)
コンジャラー
シビレクラゲ(しびれクラゲ)
バクダンイワ(爆弾岩)
プテラノドン
ベビーサタン
ヘルビートル
マンドレイク
ミニデーモン
レイギガース
●7文字
アイスコントル
アームライオン
アンクルホーン
ウズシオキング(渦潮キング)
ガイコツケンシ(ガイコツ剣士)
キラースコップ
キンクスライム
サマヨウヨロイ(さまよう鎧)
サンドマスター
シビレダンビラ(しびれだんびら)
スモールグール
デビルプラント
トーテムキラー
トンガリアタマ(とんがり頭)
ブリザードマン
フレイムドック
マージマタンゴ
マンルースター
ミナライアクマ(見習い悪魔)
●8文字
ガッタイスライム(合体スライム)
グレートオーラス
サマヨウタマシイ(さまよう魂)
ダークトリアード
トウダイタイガー(灯台タイガー)
メイジモモンジャ(メイジももんじゃ)
ライノソルジャー
●9文字
ジャイアントバット
スライムベホマズン

さて、キミのレベルは?

10分以内でできた人 LV40
キミはどんなモンスターが現れてもビクともしない強さと賢さを持っている。君こそ、真の勇者だ!

20分以内でできた人 LV20
合格!! しかし魔王との戦いにはまだ苦戦しそうだ。真の勇者のレベルに達するまで、もうひとがんばりだ!

30分以内でできた人 LV10
もう少しがんばらねば、手強いモンスターを相手にするには力不足だ。もっと修行をつみ、経験値をあげよう。

30分以上かかった人 LV5
まだまだ経験値不足だ。でも勇者たってはじめはスライムと戦ってレベルをあげたんだ。キミもがんばれ!

ミネアのタロット占い

★ミネアの持っている銀のタロットは、もともと占いをするための道具だ〃ここでは、ちょっと変わった占い方を紹介しよう。その日その日で結果が変わるから、みんなも占ってみてね〃　あっ　それから１日３回までは、占いをやり直す事ができるから、悪い結果が出てもガッカリしないでね〃

①太陽のカード
10
100
190

②悪魔のカード
20
110
200

③正義のカード
30
120
210

④死神のカード
40
130
220

⑤星のカード
50
140
230

⑥塔のカード
60
150
240

⑦力のカード
70
160
250

⑧ひいては
いけないカード
80
170
260

⑨月のカード
90
180
270

占い方

♡占い方はとっても簡単〃 まず、占いたい事がらを決めて、頭の中で2ケタの数字をおもい浮かべます。そして、その数字に自分の歳と、今日の月日をたします。(例・16歳の人が21をおもい浮かべて11月7日に占う場合…21+16+11+7=55)次に合計した数だけ①のカードから順に矢印の方向へ回っていき、止まったカードが占いの結果です。内容は、下の表を見てね〃 あっ、それからもし悪い結果がでてしまっても、タロットカードは、1日に3回までは同じ事がらを占い直す事が出来るから、あまりクヨクヨしないでね〃
※合計した数が大きい時などは、各カードの左上の数字を参考にしてね！
(左上の数字は、①のカードから回った時の10コめ、20コめ、30コめ の数字を表しています。)

①太陽のカード

生命力の象徴

あなたの情熱がなくならないかぎり、願い事はかなえられます。

②悪魔のカード

欲望の象徴

あなたに邪悪が感じられます。必要以上に欲望を求めると、悪魔にスキを見せる事になりますよ…。

③正義のカード

調和の象徴

あなたは、正義の光につつまれています。このままいけば願い事はかなえられるでしょう。

④死神のカード

停止の象徴

よくない暗示が出ています。今はまだ事を起こさないほうがよいでしょう。

⑤星のカード

希望の象徴

幸運の星に守られています。思っている以上の成果を期待できますよ〃。

⑥塔のカード

壊滅の象徴

警告の暗示が出ています。優しさを忘れてはいませんか？ 初心に帰らなければ願い事はかないませんよ！

⑦力のカード

力強さの象徴

自分の意志をしっかり持ち続けていれば、時間はかかりますが願い事はかないます。

⑧ひいてはいけないカード

完全の象徴

はっきり言って最悪のカードです。これ以上私の口からは…何も。

⑨月のカード

迷いの象徴

心に迷いが感じられます。願い事の前に自分の気持ちをきちんと整理しましょう。

キミにピッタリの
4人パーティーはこれだ！
キミはもうドラクエⅣのプレイは終ってるよね？ 導かれし者たち8人のなかで、それぞれお気に入りの4人パーティーはどういうパーティーだったかな。さて、このチャートをたどれば、キミにピッタリの4人パーティーがわかるぞ。Yes、Noにしたがって進んでいこう！
Yes
No
START
AI戦闘はいつも「ガンガンいこうぜ」だった
ファミコンをこわしたことがある
フィールドよりダンジョンの方が好きだ
仲間が死んでもそのままにしておくことがある
勇者に自分の名前をつけた
初めてダンジョンを進むカンがいい
強いモンスターが出てくるとワクワクする

A
B
C
D
呪文を使うときは必ず口でも唱えた
つねに最強装備でないと気がすまない
アリーナ、ミネア、マーニャには3人共ピンクのレオタードを着せた
ドラクエをやると体力を消耗する
お助けキャラたちとは別れたくなかった
とりあえず女のコが好きだ
4人でパーティーを組むのは好きじゃない

A

メラギラ呪文パーティー

呪文が大好きなキミは攻撃呪文でバタバタとモンスターを倒していくタイプだ。パーティーは勇者、マーニャ、ブライ、クリフトがいいだろう。マーニャのイオナズン、クリフトのザラキがきまればもう恐い者なしだ。ティン系最強のミナデインだってできちゃうぞ。

B

ビシバシ打撃パーティー

呪文があまり得意でないキミ。キミは勇者、ライアン、トルネコ、アリーナの究極の打撃攻撃パーティーがお勧めだ。HPの回復のことなど気にせずモンスターをぶん殴るのがこのパーティーの楽しいところ。とにかくガンガン攻撃しよう。薬草を忘れずにね。

C

ウキウキ女のコパーティー

勇者、アリーナ、マーニャ、ミネア。勇者と魅力的な女のコ3人のパーティーがキミにはピッタリ。このパーティーは攻守のバランスがとれているから旅をするには一番安心かもね。女のコにしかできない装備でドレスアップして冒険に出かけようー

D

バラバラ変則パーティー

普通のパーティーでは満足できないキミ。どうもキミにピッタリの4人パーティーは、選びきれない。お助けキャラとのパーティーとか、4人ではなく2人・3人の変則パーティーが向いてるみたいだ。レベルをあげて孤独に一人で冒険するのも悪くないかもね。

保存版!! モンスターコレクション!
モンスター大格闘技大会!!
※遊び方は、裏面を見てねっ〃
スライム
HP 8 攻撃力 9
MP 0 守備力 5
すばやさ 3
キングスライム
HP 150 攻備力 40
MP 2 守備力 24
すばやさ 17
裏切り小僧
HP 35 攻撃力 37
MP 0 守備力 30
すばやさ 3
かまいたち
HP 41 攻撃力 29
MP 4 守備力 31
すばやさ 40
さそりアーマー
HP 40 攻撃力 33
MP 0 守備力 42
すばやさ 9
死神
HP 130 攻備力 140
MP 0 守備力 85
すばやさ 53
地獄の門番
HP 250 攻撃力 130
MP 26 守備力 116
すばやさ 61
ライノスキング
HP 220 攻撃力 200
MP 7 守備力 160
すばやさ 70
ベルザブル
HP 250 攻備力 6
MP 23 守備力 0
すばやさ 66
フレイムドック
HP 165 攻撃力 170
MP 0 守備力 30
すばやさ 61
レッドドラゴン
HP 167 攻備力 163
MP 28 守備力 90
すばやさ 78
ドラゴンライダー
HP 141 攻備力 115
MP 0 守備力 67
すばやさ 70
鉄球魔人
HP 380 攻備力 220
MP 0 守備力 90
すばやさ 55
土偶戦士
HP 400 攻撃力 142
MP 守備力 140
すばやさ 120
ビースト
HP 176 攻備力 125
MP 0 守備力 73
すばやさ 54
大魔道
HP 1023 攻備力 162
MP 守備力 160
すばやさ 220

遊び方

本紙からカードをきりぬいて、よくきり、モンスターを裏にして山をつくります。それを1人1人めくって1番HPやMPなどの大きかった人の勝ち。（どの数値で勝負するかは、闘う前にみんなで決めてね〃 1回勝負だよ〜）ひまな時や、何かの順番を決める時に使ってね。それから、カードはなくさない様に、ちゃんと保管しておこうね！

★恐怖のダンジョンゲームの遊び方★

「ストーリー」

どうやら、勇者たちは、自分たちよりはるかにレベルの高いモンスターが、ウヨウヨいるダンジョンに来てしまったらしい……。もし、モンスターに遭遇すれば間違いなくパーティーは全滅するだろう……。しかし、ここで幻のアイテム「賢者の石」を手に入れればきっとこの危機をのりこえられるぞ〃

はたして勇者たちは、無事ダンジョンを突破する事ができるであろうか……?

★遊び方★

- 用意するもの　　サイコロ……1コ　コマ(何でもいいよ〃)……2コ

①勇者側とモンスター側の2つに別れ、それぞれのスタート位置にコマを置きます。

②勇者側からサイコロをふり、コマを進めます。モンスターは出た数より2マス多く進めます。壁をこえなければどこへ進んでも構いませんが、行き止まり以外は1回に同じマスを通る事はできません。進入禁止の場所は以下の通りです。勇者側▶モンスターのスタート位置、モンスターのコマがある箇所、川。モンスター側▶勇者のスタート位置、川、トヘロスのマス、ゴール。

③モンスターに出会うことなく「賢者の石」にたどりつけば勇者の勝ち。勇者が「賢者の石」を取る前に、彼らと同じマスに止まるか、通過すればモンスターの勝ちです。

★みんなもトルネコにつづけゲームの遊び方★

「ストーリー」

魔物を倒し、勇者たちと別れ、エンドールの町に帰ってきたトルネコは、やがて立派な自分の武器屋を持つ事ができました……。それに影響された、同じ様な夢を持つ若者たちは自分の店を持つために、以前よりはるかに安全になった世界へ、いろいろなアイテムを捜しに旅立つのでした。

132ページの解答

★遊び方★

- 用意するもの
  サイコロ……1コ
  コマ(何でもいいよ〃)……人数分

①ゲームの順番を決め、1番の人からサイコロをふり、出た数だけスタート位置からコマを進めます。止まったマスにコマンドがあれば、指示に従います。(ストップのマスはサイコロの目に関係なくそこで止まり、その指示に従います) 又、指示により戻ったり進んだりした時は、そのマスのコマンドには従わなくても構いません。

②1番早く自分の店を持てた人（ゴールした人)の勝ちなのですが、手持ちのアイテムが10コ以上ないと、ゴールする事はできません。(アイテムが10コ未満でゴールした時は、ストップのマスまでコマを戻し、次の順番からまたゲームを始めます)

手持のアイテム数はマッチ棒などでかぞえておくといいよ！

ゲームは切りとって遊んでね〃

ドラゴンクエストブックシリーズ
好評発売中
小説
ドラゴンクエストIII
そして伝説へ 上 下
四六判 豪華上製本
定価各1000円
ドラゴンクエストIV
導かれし者たち
公式ガイドブック
B6判 オールカラー
ドラゴンクエストIV
モンスター物語
A5判オールカラー
ドラゴンクエスト
モンスター物語
A5判オールカラー
ドラゴンクエスト
アイテム物語
A5判オールカラー
ドラゴンクエストIII
知られざる伝説
A5判オールカラー 定価700円
ドラゴンクエスト
精霊ルビス伝説
四六判 豪華上製本
ドラゴンクエスト
4コママンガ劇場
■公式ガイドブックシリーズ
ドラゴンクエスト
公式ガイドブック
トラゴンクエストII 悪霊の神々
公式ガイドブック
ドラゴンクエストIII そして伝説へ
公式ガイドブック
B5判 オールカラー 定価700円
■ゲームブックシリーズ
ゲームブック
ドラゴンクエスト
文庫判
ゲームブック
ドラゴンクエストII
文庫判
ゲームブック
ドラゴンクエストIII
文庫判
■小説シリーズ
小説 ドラゴンクエスト
四六判 豪華上製本 定価1300円
小説 ドラゴンクエストII 悪霊の神々 上 下
四六判 豪華上製本 定価各1000円
(定価はすべて消費税を含んだ価格です)
株式会社 エニックス 出版局
営業部 〒160 東京都新宿区西新宿7-5-25 西新宿木村屋ビル5F TEL.03-366-8382
編集部 〒160 東京都新宿区西新宿7-3-4 仁杉ビル4F TEL.03-369-6376

[ドラゴンクエストIV]

原作/ゲームドラゴンクエストIV導かれし者たち
シナリオ/堀井雄二

制作
エニックス出版局
編集人
千田幸信
本文構成
横倉廣 桑野隆志
本文
とまとあき/横倉廣/小柳順治/桑野隆志/こどもの館
イラスト
菊池通隆/銀英社/中沢数宣 富所和子/矢野たくみ/森直子 武藤恵美 有賀等
レイアウト・デザイン
クリエイティブ・ピクシーズ

1990年11月15日　初版第一刷発行
1991年2月5日　初版第二刷発行
発行人　福嶋康博
発行所　株式会社エニックス
　営業部　東京都新宿区西新宿7-5-25
　　　　　西新宿木村屋ビル5F　TEL 03(369)8982(代)
　出版局　東京都新宿区西新宿7-3-4
　　　　　仁杉ビル4F　　　　　TEL 03(369)8978(代)
印刷所　大日本印刷株式会社

みんなもトルネコにつづけゲーム!!
遊び方は、141ページを読んでね！
スタート
持っていたアイテムを全部盗まれた スタートまで戻る
「いばらの鞭」を見つけた！
ラッキーチャンス 誰かのアイテムを１コもらえる！
「ドラゴンキラー」を見つけた！
「皮のドレス」を見つけた！
「奇跡の剣」を見つけた！
「こん棒」を２コ見つけた
「毒針」を見つけた！
モンスターに襲われた ６マス戻る！
「くさり鎌」を見つけた！ ２マス進む！
「こん棒」を見つけた！
「銅の剣」を見つけた！
「鋼鉄の剣」を見つけた！
「魔法の法衣」を見つけた！
「毒針」を見つけた！
「はぐれメタルヘルム」を見つけた！ 矢印のマスまで進む！
「理力の杖」を見つけた！
「祝福の杖」を見つけた！
「くさりかたびら」を見つけた！
魔物にアイテムを全部盗まれてしまった １回休み！
「水の羽衣」を見つけた！ ３マス進む！
「微笑みの杖」を見つけた！
「モーニングスター」を見つけた！
転んだ拍子にアイテムを３コなくしてしまった！ １回休み！
魔物に襲われひたすら逃げる 矢印のマスまで戻る
落とし穴に、真っさかさまに落ちてしまった!! 矢印のマスまで戻る！
「キラーピアス」を見つけた。
「ブーメラン」を見つけた！
バブルスライムに、毒をかけられた！ １回休み
「はぐれメタルの盾」を見つけた！ 矢印のマスまで進む！
魔物にラリホーをかけられた！ ２回休み
ゴール
「魔封じの杖」を見つけた。
アイテムを２コなくしてしまった!! ３マス戻る！
「旅人の服」を見つけた！
「こん棒」を見つけた！ ２マス進む！
「ひのきの棒」を見つけた！ ２マス進む！
「氷の刃」を見つけた！
魔物に襲われひたすら逃げる 矢印のマスまで戻る！
間違って、「時の砂」を使ってしまった！ 矢印のマスまで戻る！
「鉄の槍」を見つけた！
「鋼鉄の鎧」を見つけた！ ３マス進む！
「木の帽子」を見つけた！ １マス進む！
「銀のタロット」を見つけた！
「はぐれメタルの剣」を見つけた 矢印のマスまで進む！
魔物にアイテムを３コ盗まれた！ ２マス戻る！
「銅の剣」を見つけた！
「光のドレス」を見つけた！
「いかずちの杖」を見つけた！ ２マス進む！
「絹のローブ」を見つけた！
間違って、「風神の盾」を自分に使ってしまった！ 矢印のマスまで戻る！
「鋼鉄の鎧」を見つけた！
「青銅の鎧」を見つけた！
「毒蛾のナイフ」を見つけた！
超大ラッキーチャンス！ 誰かのアイテムを４コもらえる！
「バトルアックス」を見つけた！
魔物にラリホーをかけられた！ ２回休み
「天罰の杖」を見つけた！
魔物にアイテムを３コ盗まれた！ ２マス戻る！
「まどろみの剣」を見つけた！
ラッキーチャンス 誰かのアイテムを２コもらえる！
「はぐれメタル鎧」を見つけた 矢印のマスまで進む！
ストップ
★アイテムを４コ以上持っていなければ、40マス戻る

恐怖のダンジョンゲーム
アイテム
ゴール
賢者の石
トヘロス
トヘロス
トヘロス
あと、2マス進める
スタート
(モンスター)
相手を2マス動かす
相手を1マス動かす
トヘロス
トヘロス
トヘロス
相手を3マス動かす
トヘロス
相手を4マス動かす
あと、3マス進める
スタート
(勇者)
あと、1マス進める
トヘロス
トヘロス